

日本古代都城造営の史的意義：東アジア世界の歴史潮流の中で

著者	井上 和人
雑誌名	日文研叢書
巻	42
ページ	95-138
発行年	2008-12-26
シリーズ	共同研究報告書 No. 87
URL	http://doi.org/10.15055/00005193

日本古代都城造営の史的意義

—東アジア世界の歴史潮流の中で—

井上和人

奈良文化財研究所

はじめに

日本列島において、方格の都市計画をとまなう都城は藤原京を嚆矢とする。持統天皇の694年に、それまで宮室の所在した飛鳥浄御原宮から藤原京への遷都が挙行され、710年までの間、わが国の首都として機能する。『日本書紀』天武12年12月17日条に、「およそ都城宮室は一处にあらず…」とあるように、天皇の居所である内裏を中心として、国家的儀礼の場である朝堂院、国家レベルの官庁群の所在する藤原宮、平城宮などを「宮室」と称し、その宮域を取り巻く規格的な条坊街区と条坊道路網で構成される都市域を「都城」と呼んでいたことが知られる。

都城以前 藤原京以前の中央政治組織の遺跡・遺構としての具体的な存在形態については、まだ不分明な点が少なくない。7世紀代の宮室の所在位置や平面構造に関しては、近年の発掘調査研究の進捗により、とくに宮殿や儀礼空間の解明が進んでいるものの（林部2001・小澤2003）、後の都城遺跡で確認されているような官衙については、それが宮殿域に直接する地域に集中して配置されていたのか、分散していたのか、あるいは政権を構成する中央氏族の居住地ないし居宅の所在地や分布状況がどうであったかということもまだよくわかっていない。

遷都の世紀 6世紀おわりに大和飛鳥の西北にあたる場所に推古天皇の豊浦宮が営まれて以後、宮室は飛鳥の狭小な盆地地形の中での造営が繰り返される（図1）。そして672年の壬申の乱に勝利を得て即位した天武天皇とその政権により、飛鳥の西北の広闊な平野域に藤原京の建設が遂行されたのである。藤原京造営の歴史的動因に関しては後で論究するが、694年に首都として成立した藤原京も、わずか16年で新都平城京に遷都するに及んで廃絶されるに至る。最近10年来の発掘調査の成果は、藤原京が、従前の理解とは逆に、後の平城京よりも大規模であったことを明らかにしているが、それだけに、平城京遷都の歴史上の意味づけの再考が迫られているのである。710年から74年間続いた奈良時代の間、740年代に、平城京は一旦放棄され、^くに^しが^らき^なに^わ、恭仁京、紫香楽宮、難波京と矢継ぎ早に遷都が繰り返される。再び平城京

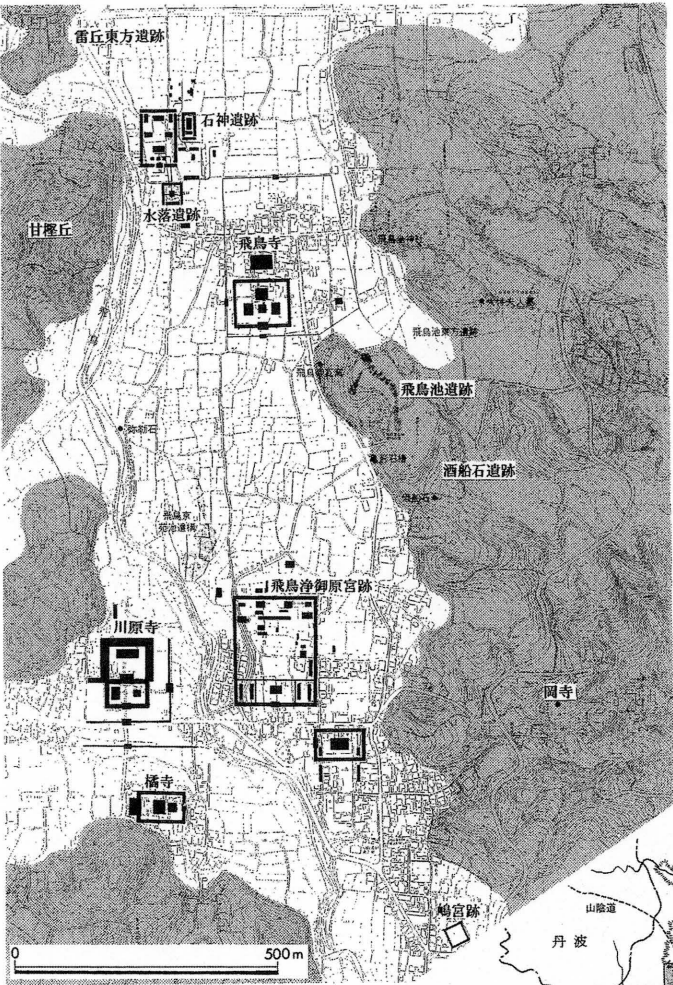


図1 大和飛鳥盆地の
7世紀代の宮殿・寺院跡

飛鳥浄御原宮	672~694
藤原京	694~710
平城京	710~784
恭仁(く)に京	740~744
紫香楽(しがらき)宮	745
難波(なにわ)京(副都)	732頃~784
長岡京	784~794
平安京	794~

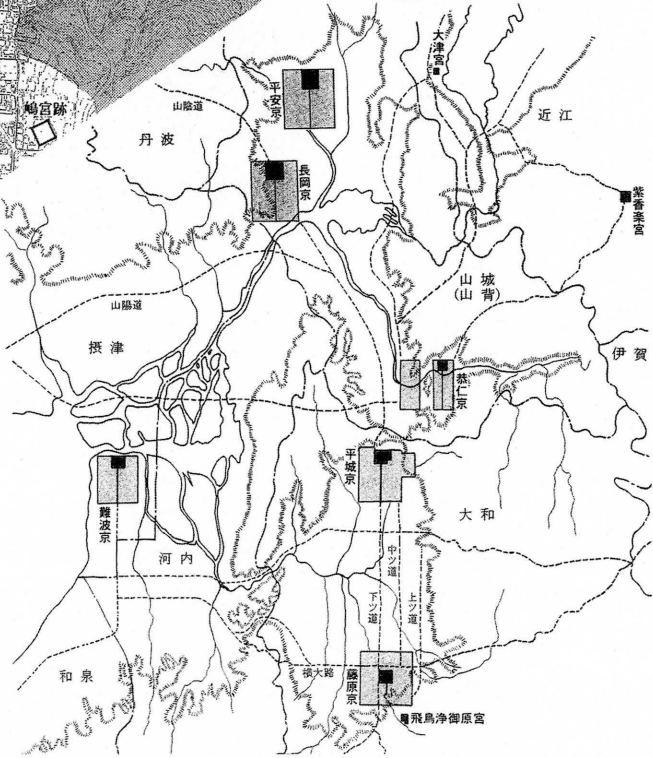


図2 古代畿内での都城変遷図

に遷都して 30 年足らずで、新たに長岡京が建設され、さらに 10 年後の 794 年には平安京に遷都されることになった。このように、694 年からちょうど 100 年の間に、本格的な都城で数えると、藤原京、平城京、難波京（8 世紀前半に副都として造営）、恭仁京、長岡京、平安京と、六つの大規模な人工都市の建設が繰り返されたことになる（図 2）。

本報告の主旨 古代日本における遷都の理由を、個別の歴史的要因を超えて通底する論理として追究すべきとする研究動向がある（浅野 2004）。そこでの結論を閲すると、8 世紀以降のわが国の都城の遷都は「天皇を唯一の首長とする国家という幻想の共同体を再構築することで、新王朝が自らの王権としての自己表現をしたのだ」という。大変興味深い評言ではあるが、しかし、このようなあまりに端的な論理化は、往々にして「個別の歴史要因」の理解を妨げかねないと私は考える。いわんや、その追究が、確かな事実理解に存立していない場合においてをや。

日本における初期都城として位置付けられる藤原京、平城京の造営は、その背後で展開された国家組織の構築という政治的事象そのものも含めて、当時の熾烈な国際関係に促されたものであり、国家統一が成就した、あるいは国家財政力が充実したことを^{ことば}寿ごうとしたからなどというものではありえなかった。従って、かつて「中央集権支配の」そして「皇権隆盛の未曾有のシンボル」であるなどと総括された平城京遷都の歴史上の位置付け（王 1988）は、まったく当を得たものではなく、以下に論述するように、逆に、緊迫した国際関係の中で、国家維持のために、中央集権支配体制の、そして皇権の確立をはかるために都城を造営せざるをえなかったと理解すべきであると考え。本報告ではこうした古代都城の造営の意味の解明を、形制分析の側面から試みる。対象とするのは日本にあっては藤原京、平城京であり、また同時代に東アジア世界を構成していた渤海の都城である上京龍泉府や統一新羅の都城、慶州王京についても言及する。いうまでもなく、7・8 世紀代の東アジアの歴史は中国大陸に成立した隋、唐の大帝国の動勢に常に大きな影響を受けながら推移した。周辺の各国における都城の建設もそうした国際関係上の政治動向と決して無縁ではなく、むしろきわめて鋭敏に反映しているとみられるのである。

1. 日本における初期都城－藤原京と平城京－

1－1. 平城京の形制（その 1）

平城京遷都 和銅 3 年（710）3 月 10 日、藤原京から平城京への遷都が挙行される。最近の調査研究によれば、遷都当初の平城京は、まだ完成には至っていなかったことが明らかにされている（井上 1984a・田辺 2002・武田 2002）。また平城宮も未完成であり（井上 2002）、なかんずく、平城宮内で最も重要な建造物の一つであ

る大極殿は710年当時まだ建設されてなく、竣工は少なくとも5年近く経過した和銅8年のことであった(渡辺2003)。

平城京の条坊制 平城京は南北9条で、東西は朱雀大路を中軸線として、西側(右京)に4坊、東側(左京)に4坊、都合8坊分の、全体として南北に長い長方形の平面形態をとる(図3)。左京の東辺北半にはさらに東へ3坊分の張り出し部分があり、外京と仮称している(関野1907)。ここでいう1条、1坊の実際の規模は約532.2m(=1,500大尺=1,800小尺)あり、従って、平城京の全体規模は、南北4,789.8m、東西が外京を含めると5,854.2m、外京を除く東西8坊部分では4,257.6mであったことになる⁽¹⁾。宮室にあたる平城宮は、平城京の北端中央に位置する。

平城京には東西方向に条路、南北方向に坊路が設定され、文字通り縦横に通じた条坊道路により区画された方形の街区とともに、中唐の詩人白居易が唐長安城について七言絶句に表現したように、「**圉碁局に似**」た景観を現出していた。なお、平城京の右京の北端には、北辺坊と称される、南北が半坊分の幅の付加部分がある。こ

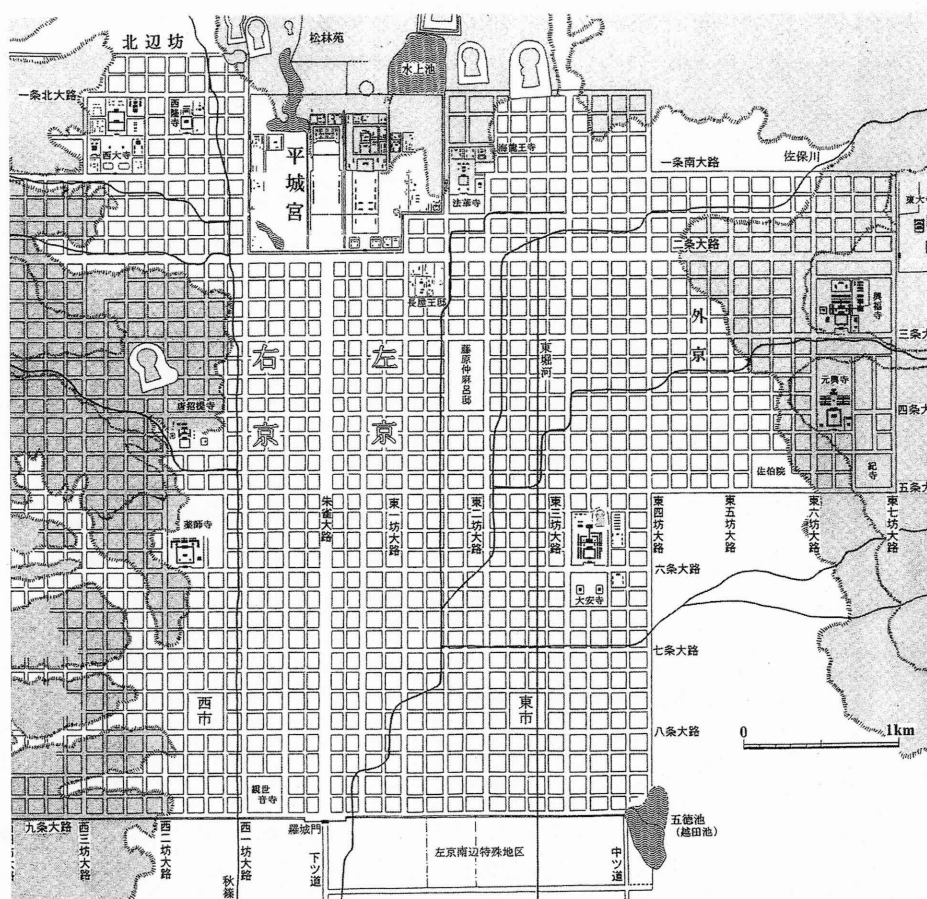


図3 平城京形制復元図 1:50,000

の条坊域の性格に関しては、虚構説も含めて様々な議論があったが、奈良時代後半期に右京北域に造営された大規模な官営寺院である西大寺、西隆寺の占地に伴い拡張された京城と判断される（井上 2005a）。北辺坊に限らず、平城京の形制の大概は遺存地割の分析を通じて復元されてきた。現存する水田や道路に平城京当時の条坊道路や街区の形跡が如実に残されており（図 4）（岸 1974）、平城宮内でも内裏や朝堂院の大区画だけでなく、官衙区画や基幹排水路などの状況をかなり詳細に解析することができる（図 5）（井上 2005b）。1950 年代以降推進された平城京城における数多くの発掘調査でも、遺存地割の妥当性が実証され、より精緻な形制復元が進められている（武田 2002・井上 2004a など）。

平城京の条坊道路 平城京の条坊道路は、朱雀大路を最大として、最小の小路にいたるまで、様々な規模を示している。条坊道路には路面敷の両側に例外なく側溝が設定される。さらに側溝の外側には、隣接する街区との区画施設として築地塀ないしは掘立柱塀が設けられる。朱雀大路の場合、東・西側溝の中心線間の距離（こ

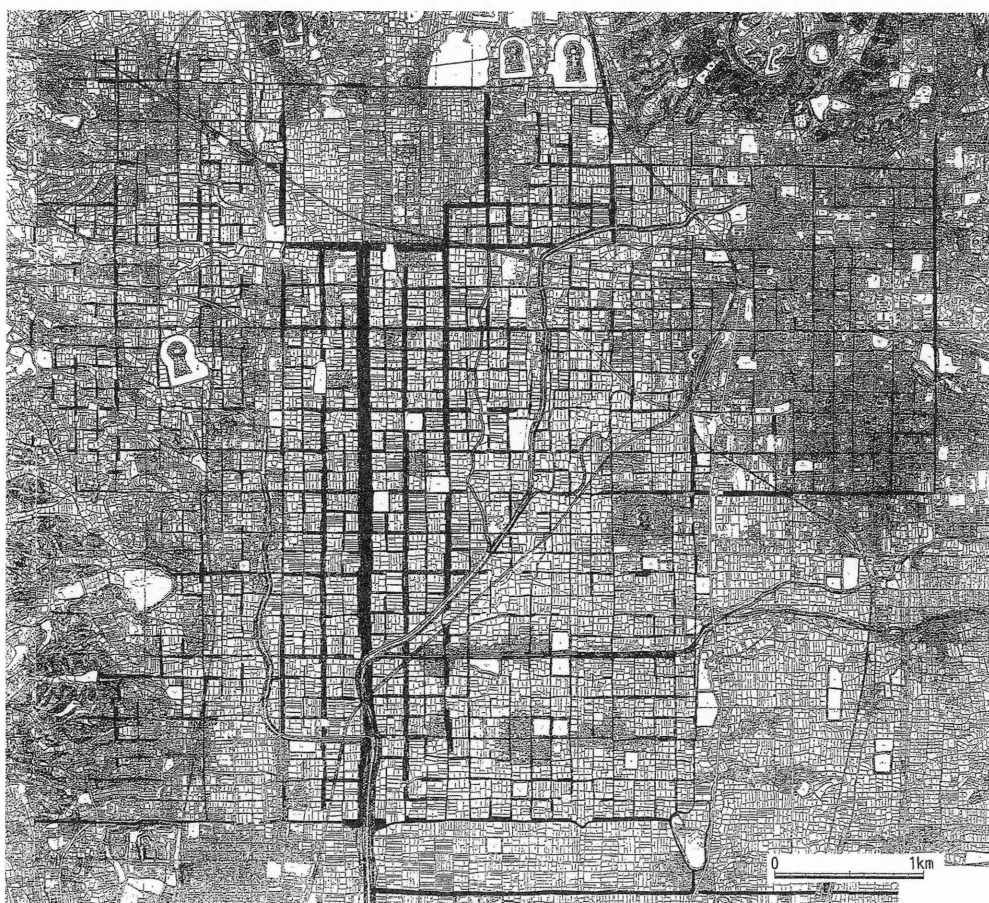


図 4 平城京遺存地割図

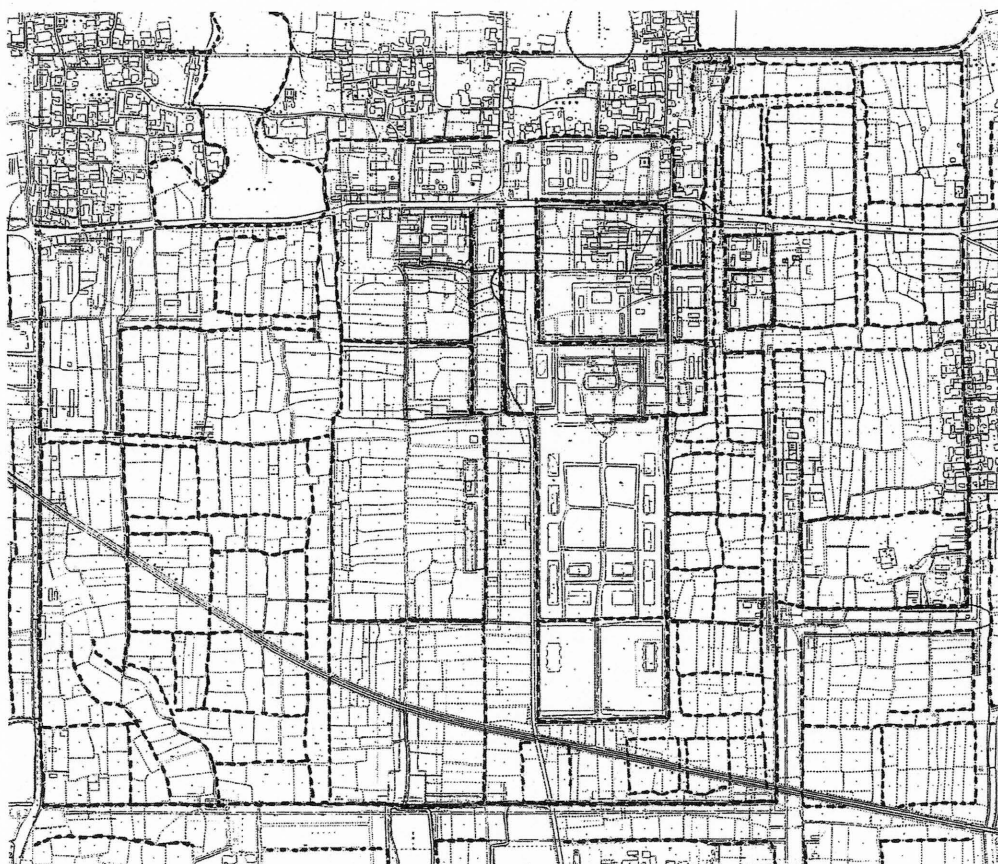


图5 平城宮遺存地割図

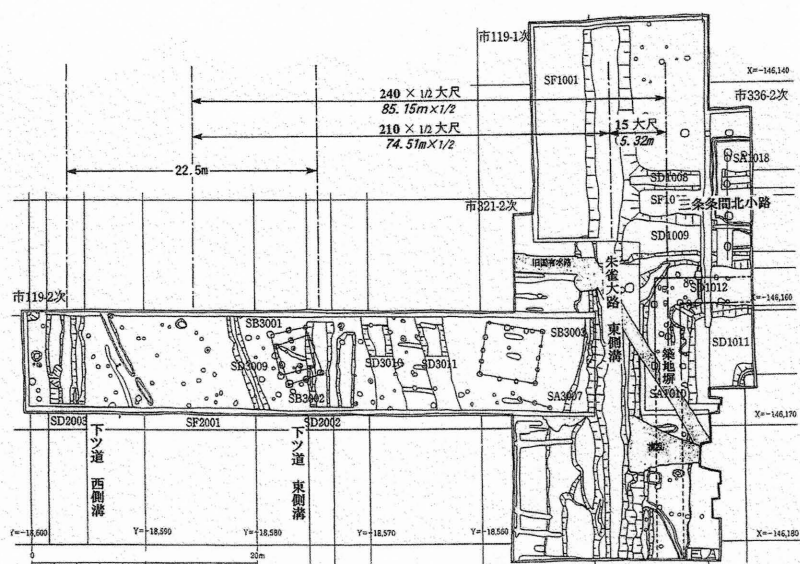


図6 平城京三条での朱雀大路

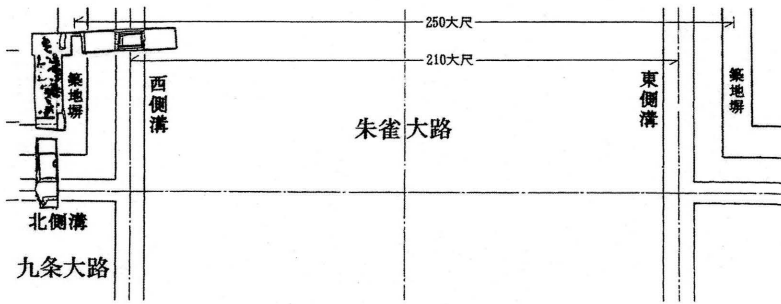


図 7 平城京九条
での朱雀大路

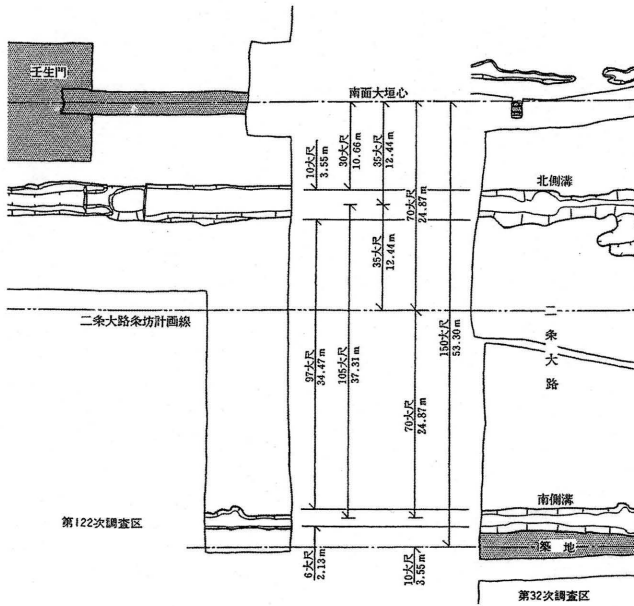


図 8 平城宮壬生門周辺
二条大路遺構図

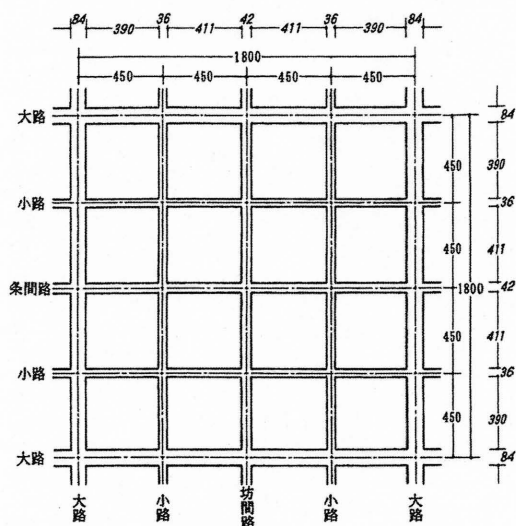
多くの小路	側溝心々間距離：20小尺
多くの小路	20大尺
条間路・坊間路	25大尺
四条条間路	30大尺
六条大路	40大尺
西二坊大路・東四坊大路・ 三条大路・二条条間路	45大尺
西三坊大路・東一坊坊間大路	60大尺
東一坊大路・西一坊大路(?)	80小尺
西一坊大路(?)・西一坊坊間大路	70大尺
二条大路	105大尺
朱雀大路	210大尺

図 9 平城京条坊道
路設定規格図

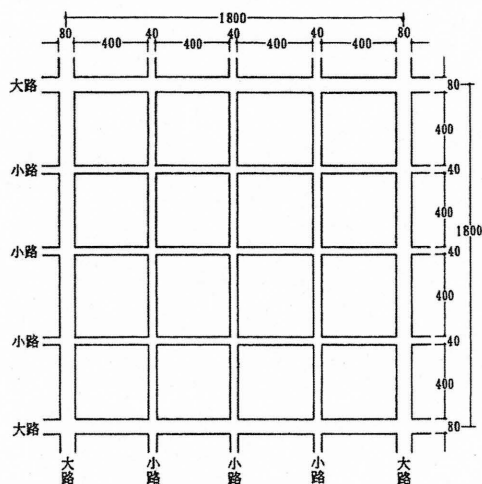
れを側溝心心間距離と言う)で210大尺〔74.5m(復元値:以下同じ)〕あり、築地心心間距離は平城宮に近い三条付近では240大尺〔85.2m〕、京城の南端に近い九条では250大尺〔88.7m〕という調査成果がある(図6・7)(井上2004b)。朱雀大路に次ぐ規模の条坊道路は、平城宮の南辺に沿って東西に通じる二条大路で、側溝心心間距離は朱雀大路の2分の1に当たる105大尺

〔37.3m〕である(図8)。二条大路以外の大路は60大尺から40大尺まで、いくつかの段階がある。大路と大路の間には等間隔に3条の小路が設定される。後の平安京では、10世紀に編纂された、律令の注釈書である『延喜式』の左京職式「京程」に条坊道路の規格が詳しく示されている。そこでは、3条の小路はいずれも築地心心間での幅が4丈(=40小尺)とされる。平城京にあっては、3条のうち真ん中の1条は、ほとんどの事例で側溝心心間規模が25大尺〔8.9m〕であり、20大尺〔7.1m〕ないしは20小尺〔5.9m〕である他の2条の小路よりも規模が大きい。そこでこれを条間路、坊間路と仮称して小路と区別する。この坊間路、条間路のうち、平城宮の宮城門に通じる道路は大路の称が付けられ、さらに大規模に作られる。たとえば、宮南面西門である若犬養門の門前に発する西一坊坊間大路は70大尺〔24.8m〕、南面東門である壬生門に通じる東一坊坊間大路は60大尺〔21.3m〕と、一部の大路以上に大規模に設定されている。このように、平城京の条坊道路は、おそらくその道路の位置と果たすべき機能の大小に従って、厳密な序列化が実施されていたものと考えてよい(図9)。

平城京の都市計画にあたっては、等間隔の方眼線を基準として、条坊道路はそ



平城京〔分割方式〕
(斜体数値は推定)



平安京〔集積方式〕
(『延喜式 京程』による)

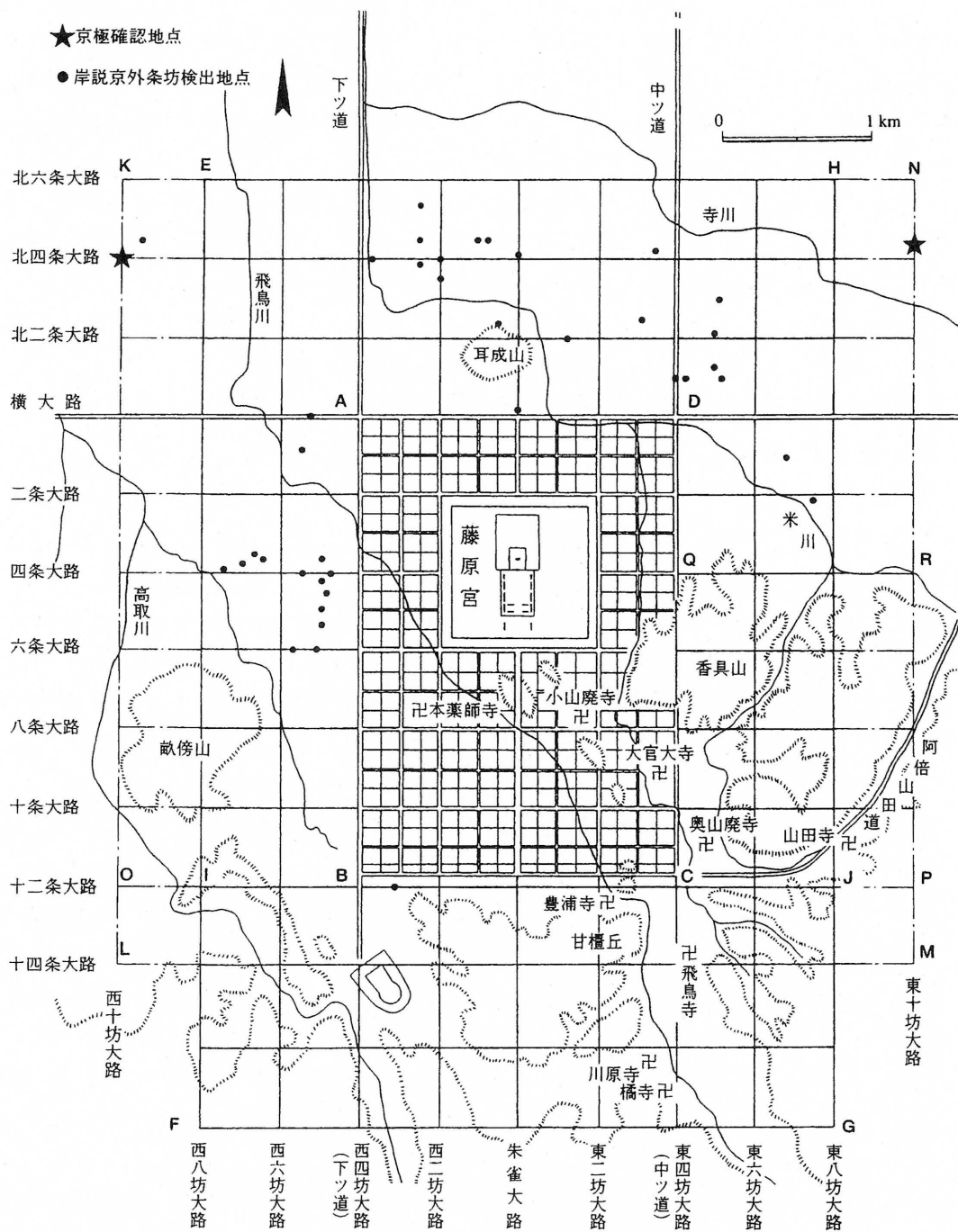
図10 平城京と平安京の条坊設定法式
(条坊道路規模は築地心心間距離・単位は少尺)

の基準線（これを条坊計画線と呼ぶ）を中軸線として設計されている。従って、条坊道路の幅が広げれば、それだけ隣接する街区の規模は小さくなる。また、条坊道路で区画される街区は「坪」ないし「町」と呼称されていたが、条坊計画線間ではいずれも 375 大尺（＝450 小尺＝約 133.1m）であるものの、築地塀、掘立柱塀で区画される実質的な敷地幅は、例えば朱雀大路に接する左京三条一坊二坪を例に復元すると、東西幅は 240 大尺〔85.2m〕、その東側の七坪は 342.5 大尺〔121.5m〕となり、かなりの違いであることになる。このような条坊設定法は分割方式と呼ばれ、後の平安京が、40 丈（＝400 小尺）四方の街区規模を固定化し、条坊道路の設定地は別に確保するという集積方式をとることと対照的である（図 10）。

1-2. 藤原京の形制

藤原京形制に関する旧説 藤原京の形制については、廃絶後にかつての京城全体に大和統一条里地割が延伸施工されたために、平城京のように遺存地割による復元研究が不可能であった。1960 年代に藤原宮域を区画する大垣の遺構が確認されたことにより、奈良盆地に 7 世紀初頭に設定された下ツ道、中ツ道、横大路などの直線官道との位置関係から東西 2.1km、南北 3.2km の京城が推定され、その中に東西 8 坊、南北 12 条の条坊を考定する復元案が提示された（図 11）（岸 1969）。この京城説によれば、条坊の 1 坊の大きさは平城京の 4 分の 1 であるものの、京城の西辺である下ツ道は、のちの平城京の中軸線と一致しており、また京城東辺を限るとされた中ツ道は北上すると、のちの平城京の左京四坊の東辺にほぼ相当する。つまり、平城京の京城は、藤原京の京城の東西幅をそのまま北に移動させて、中軸線つまり朱雀大路を中心にして西側に折り返した形で設定し、南北幅を 1.5 倍にしたものとする、極めて説得力のある説明が提示されたのであった。

「大藤原京」の検出 ところが 1980 年代頃から、藤原京の外側と考えられていた場所で、藤原京の条坊道路に一致する直線道路が発掘調査により確認されるようになった。当初、確認例の少ない状況の中にありながら、様々な「大藤原京」説が提示された。そうした動向に対して、私は慎重に考えるべきであるとする所見を開陳したこともあったが（井上 1984b）、その後さらに事例が増加し、1990 年代半ばには、50 例を超える「大藤原京」に関わる条坊道路遺構が確認されるに至った（図 11）。1996 年の春に、時を同じくして、京城の西辺（西京極）を限る道路と東京極道路が確認された（図 11 中、2 ヲ所の★の位置：樺原市教育委員会 1997・桜井市文化財協会 1997）。このことを受けて、「大」藤原京の京城は、東西 10 坊、南北も 10 条、約 5.3km 四方の正方形であり、宮室たる藤原宮はその中央に位置するという復元案が提示された（図 12）（中村 1996・小澤 1997）。それまで考えられていた京城よりも東西幅が 2.5 倍、



(条坊呼称は岸説およびその延長呼称による)

ABCD=岸俊男説, EFGH=阿部義平・押部佳周説, EIJH=秋山日出雄説,
KOPN または KOCQRN=竹田政敬説, KLMN=小沢 毅・中村太一説

図 11 “大藤原京”諸説 (小澤 1997)

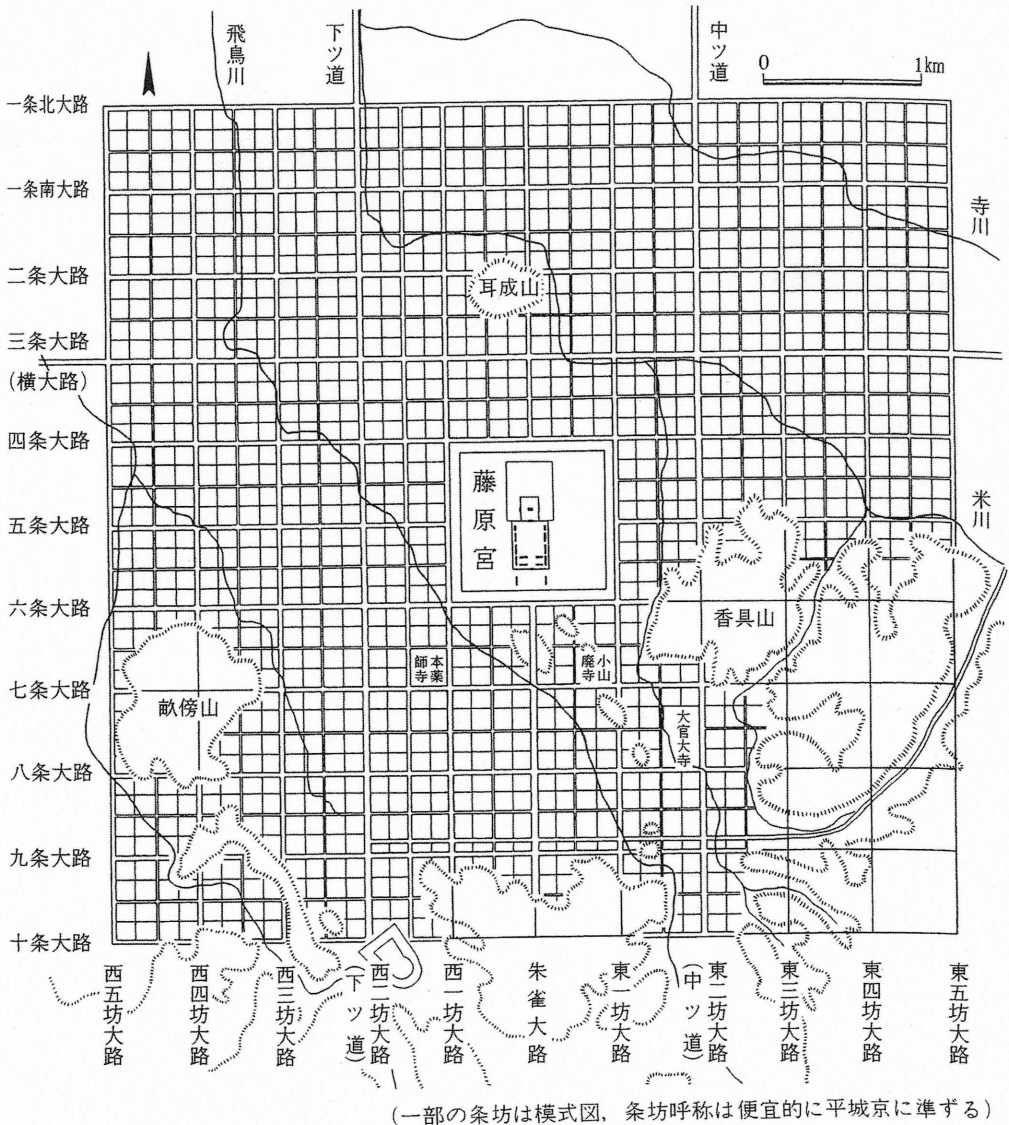


図 12 藤原京形制復元図 1:50,000 (小澤 1997)

南北幅が 1.67 倍で、広さにして 4.2 倍近くであったことになる。そしてそれは後続する平城京よりも広大なものであった。

藤原京の条坊制 藤原京の条坊制については、平城京で数詞による条坊表記が行われていたのに対して、「林坊」、「左京小治町」、「軽坊」などの固有名詞表記の文字史料が確認されるだけである。また京城が左京、右京に分別されたのは大宝令に基づく新たな行政制度に伴うものと判断されることなどから、条坊道路の呼称がどのようにおこなわれていたのか、不分明である。しかし、発掘調査により確認

されている道路規模からみると、側溝心、心間規模が 70 大尺の朱雀大路を最大として 45 大尺道路を大路、25 大尺道路を坊間路、条間路、20 大尺道路を小路とすれば、平城京の条坊道路の規格と諧調することがわかり、平城京の条坊規格は藤原京のそれを踏襲したものであったことがわかる（図 13）。

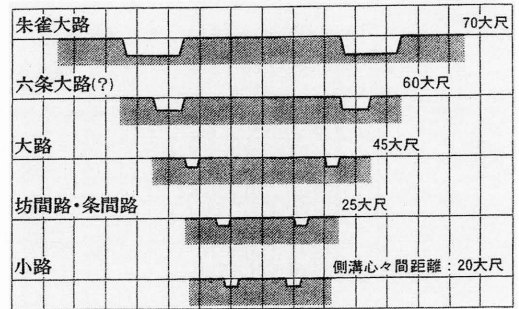


図 13 藤原京条坊道路設定規格図

1-3. 藤原京から平城京へ

遷都の実態 冒頭に述べたように、藤原京は 694 年に首都として成立して、わずか 16 年後の和銅 3 年（710）に廃絶されることになった。新都平城京への遷都に際しては、旧都藤原京の建造物は、可能な限り解体され、移築ないしは再利用された。たとえば平城宮朱雀門の軒瓦はすべて藤原宮式のものであり、建物の平面規模も同じであることから、建物ごと解体、移築されたものである（奈良国立文化財研究所 1994）。あるいは平城宮第 1 次大極殿院東面築地回廊の基壇下に設けられた暗渠排水用の木樋は、別材の木片で埋められた仕口の状況から、藤原宮の高さ 5 m に及ぶ大垣に使用されていた掘立柱であると考えられている（奈良国立文化財研究所 1982）。同様に、朝賀や天皇の即位の儀礼など、最も重要な国家的儀式を行う（第 1 次）大極殿は、藤原宮の大極殿をそのまま移築したものであり（小澤 1993）、さらにこの建物は天平 12 年（740）に遷都される恭仁宮大極殿として移建されたことが『続日本紀』に記されている。このように、遷都に伴い、ことごとく建設資材を新調しなければならないわけではなかったものの、様々な側面で莫大なエネルギーが費やされたことは間違いない。たとえば、平城京の条坊道路の総延長は 350km ほどであり、路面両側の側溝——最小の小路でも幅 1.8m の規模であった——でいえば 700km にも及ぶ。この側溝を掘削し、土砂を処理するだけでも、膨大な土木工事であったことが理解されよう。

平城京遷都諸説 平城京遷都の理由については、かねてから多くの論議がくりかえされてきた（八木 1996）。たとえば、文武天皇の直系で即位が約束されていたとする首皇子（^{おびと}聖武）のために、祖父である藤原不比等が造都を主導したとみる説があり、あるいは地理上、交通上の立地を、より利便性のある奈良盆地北端に求めたとする説、藤原京の地形が低湿で、北に低い地形を脱却する必要があったとする説、大宝令の施行に基づく国家機構の拡大に対応させ、官人層の集住をより徹底させる必要からの遷都説、飛鳥に根付く旧弊たる政治勢力からの離脱を図ったとする説な

ど、まさに諸説紛々とした研究状況であった。

いっぽう、平城宮の宮殿構造の発掘調査による解明が進む中で、国家的儀式の執行空間である朝堂院が東西に併存することが明らかになってきたことを踏まえて、藤原宮中枢部の構造の完成度が唐長安城と比較すると不十分であり、慶雲元年(704)に帰国した第7次遣唐使の報告を受けて、長安城により類似した新都の建設へと転換する有力な動機となったとする、新たな観点に基づく見解が提示されるに至り(金子 1994)、平城京遷都に関する議論は新たな局面を迎えることとなった。

先に述べたように、近年の発掘調査の成果は、藤原京の面積が平城京を凌駕するものであったことを明らかにしつつある。そうとすれば、遷都の要因を、大宝令施行に伴う行政機構の拡充への対応を求めるなどとする説明は成りがたく、また唐長安城は東南が高く、北に向かって低くなる大地形の上に建設されているのであり、むしろ藤原京に共通していることから、藤原京の地形上の不備という観点も、説得力に欠ける。あるいは、平城京遷都後、首皇子が立太子し、さらに天皇に即位するまでには、さまざまな政治的な紆余曲折があったのであり、藤原不比等の将来に備えての遷都説も、やや飛躍に過ぎよう。なお、「政治的次元での理由は遷都に付随する現象ではあっても、遷都の要因では」ありえず、遷都は、そのような政治的なレベルを超える文化的現象であるとし、宮都を遷都によって絶えず甦らせることに意味があり、完成するとほどなく次の都をつくらなければならないという強迫的な心情に促されての、「作りつつあるという演劇的行為そのもの」が目的であったなどとする見解がある(千田 1990)。しかし、こうした説明もまた、遺跡、遺構の十全な解析を前提とした議論とは言い難く、遷都という歴史事実が置かれた個々の時代状況の意味を解明する障碍となるのではないかと危惧せざるを得ない。

1-4. 平城京の形制(その2)ー長安城の形制との関わりー

朱雀大路の隔絶性 平城京の形制の概略についてはすでに述べた。朱雀大路を中軸として、左京、右京に分かれ、南北9条、東西各4坊の縦長の長方形を基本形とし、平城宮はその北端中央に配置される。左京の北半部の1条から5条には、さらに東に3坊分の外京が張り出す。この平城京の平面プランは、藤原京とは大きく異なっているが、京城全体の形状だけでなく、いくつかの重要な局面で、平城京は藤原京とは異なった形制を採っている。前項までの記述で明らかのように、条坊道路の規模をみると、平城京の朱雀大路は210大尺であり、藤原京の朱雀大路70大尺の3倍に拡大している。また藤原京では朱雀大路に次ぐ条坊道路は藤原宮域の南辺に東西に通じる「六条大路」で、側溝心心間距離で60大尺〔21.2m〕(藤原宮の造営尺長は、南面大垣の遺構から求めた1小尺=29.50cm, 1大尺=35.40cmを援用する)、そしてその他の大

路級の道路は 45 大尺〔15.9m〕であり、平城宮での朱雀大路の規模の極端な隔絶性は認められない。

平城京朱雀大路の規模は側溝心心間距離で 210 大尺〔74.6m〕、築地塀心心間距離で 250 大尺〔88.7m〕である。唐長安城では都城中軸の南北道路は朱雀街と称されていた。1960 年代に報告された中国社会科学院考古研究所の調査では、皇城に近い場所での朱雀街は側溝間の距離が 150m、都城域の南寄りでは 155m であるとされる（中国社会科学院 1963）。従って、平城京の朱雀大路はその 2 分の 1 に最も近似した 10 大尺の単位の完数值での規模として設定されていることになる。また史料の上では、長安城朱雀街は幅 100 歩とされる。100 歩は 500 尺であり、これはおそらく朱雀街の路面敷部分の規模であると推量される。長安城造営当時の度制における尺は日本の大尺ではなく、小尺と同種の尺であったが、500 尺の 2 分の 1 の 250 尺という数値を、平城京の朱雀大路の規模 250（大）尺に合わせていることになり、平城京朱雀大路を長安城朱雀街の半分に作るという意図を認めることができよう。

羅城門 平城京の正門に当たるのは、京城南面の中央に開く羅城門であった。1968 年から 1970 年にかけて実施された発掘調査により、羅城門は正面（桁行）5 間、側面（梁行）2 間、柱間寸法は 17 尺（5.0m）等間の礎石建ち、瓦葺き、重層の建造物であったとされ、その平面規模が当時全容の解明された平城宮朱雀門と全く同規模であったことも合わせて、以後、定説的な理解とみなされてきた（大和郡山市教育委員会 1972）。

ところが、近年周辺地域で進展した発掘調査の成果などを再検討したところ、羅

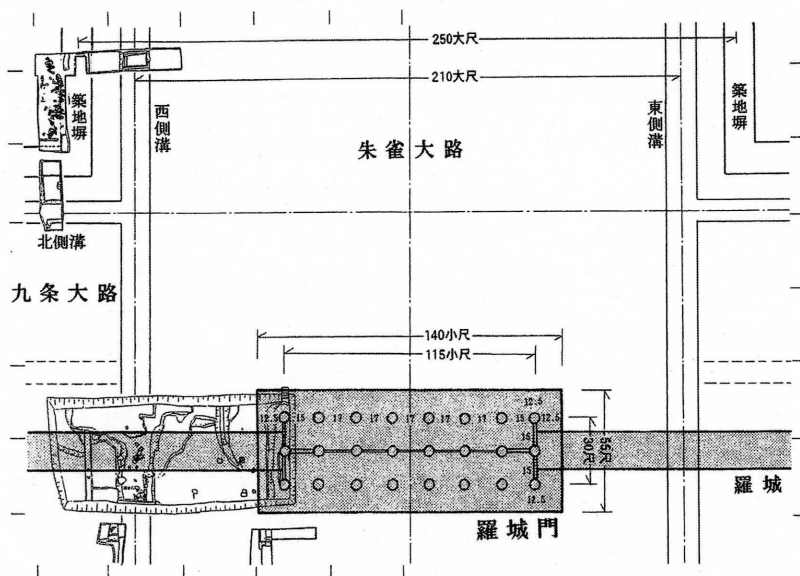


図 14 平城京羅城門平面復元図

城門の規模は桁行 7 間、梁行 2 間であり、桁行柱間寸法については、両端間が 15 尺、中の 5 間が 17 尺等間であると判断すべきことが明らかになった（図 14）（井上 1998）。つまり、羅城門は朱雀門をしのぐ、平城京最大の門建築であったことになる。門建物の場合、建物の棟通りの柱間のうち両端の各 1 間は壁仕立てとなり、それ以外の中柱間に扉が付く。羅城門の場合は、従って扉口＝通路は五つであったことが分かる。ここで注目すべきは、長安城での門制である。長安城の場合、都城域全体は城壁＝羅城で圍繞され、東西南北各面に三つずつ城門が開く。南面中央門は明德門であり、12 門中最大の規模である（図 15）。

長安城での門建築は平城京の門とは様相を異にしている。基台と呼ばれる高い壇

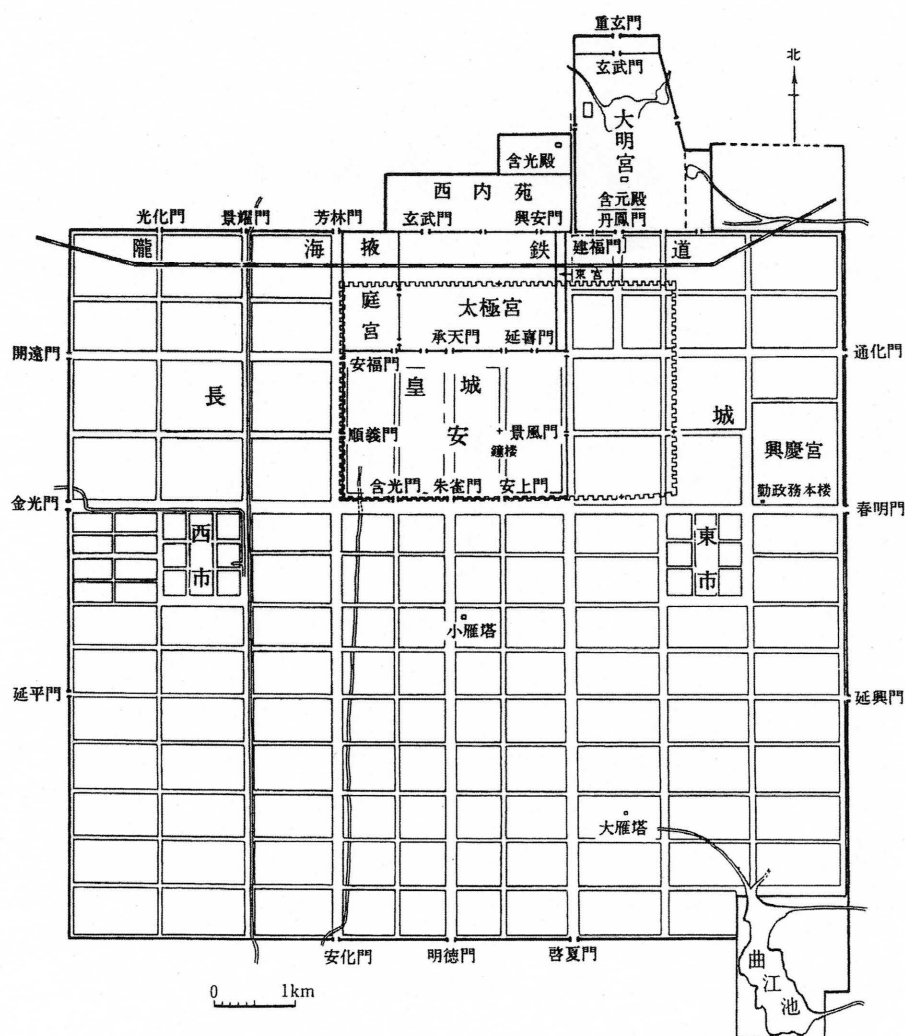


図 15 唐長安城形制復元図（中国社会科学院 1988）

上に門建築が載る。通路は基台に穿たれ、門道あるいは門洞と称される。文字通りトンネル状の通路である。明德門の場合、発掘調査により明らかにされた門道は5条設けられており、しかもその幅員は5mであった（中国社会科学院 1974）。通路の数と幅員の点で、平城京の羅城門と全くといってよいほど一致している（図16）。明德門の5条の門道の場合、中央の1条は天子道であり、皇帝専用の通路であったとされる。また長安城皇城の正門である朱雀門は門道3条であり、平城宮朱雀門は名称だけでなく、通路の数も共通している。こうした使用規制に関わる制度も含めて、平城京羅城門は長安城明德門のありようを導入することにより建造されたとみられる。ところで、藤原京にあっては、羅城門はつくられていなかったと判断される。10条10坊の京城説にあっては、羅城門の想定位置は、甘櫨丘から西方に展開する急峻な丘陵地帯のただ中にあり、およそ京城正門の立地しうる地形にない。

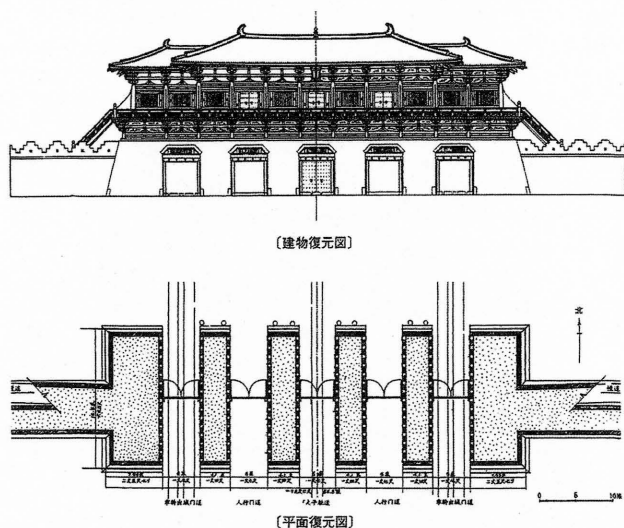


図16 唐長安城明德門（楊 1996）

羅 城 羅城門とともに、長安城をはじめとする大陸式都城に不可欠である羅城つまり都城を羅る城壁^{めぐ}も、同様に地形的条件からみて、少なくとも藤原京南面では想定しがたい。いっぽう平城京ではどうであっただろうか。この点については、前述した羅城門の発掘調査報告以後、平城京では、京城南面4.2kmのうち羅城門の両側の100mほどに限り築地塀が設けられ、それ以外は幅が20mを超す濠が設定されていたと説明されてきた。しかし、京城南面東端近くで1980年代に実施された発掘調査で検出されていた東西方向の築地遺構が羅城であると考えられることから、少なくとも京城南面では高さが5mほどと推定される築地塀が両側に幅3.6mの濠を伴って設営されていた状況を復元することができる（図17）（井上1998）。この羅城

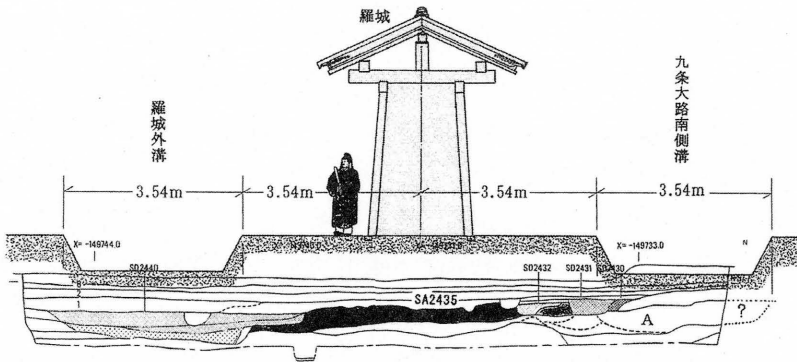
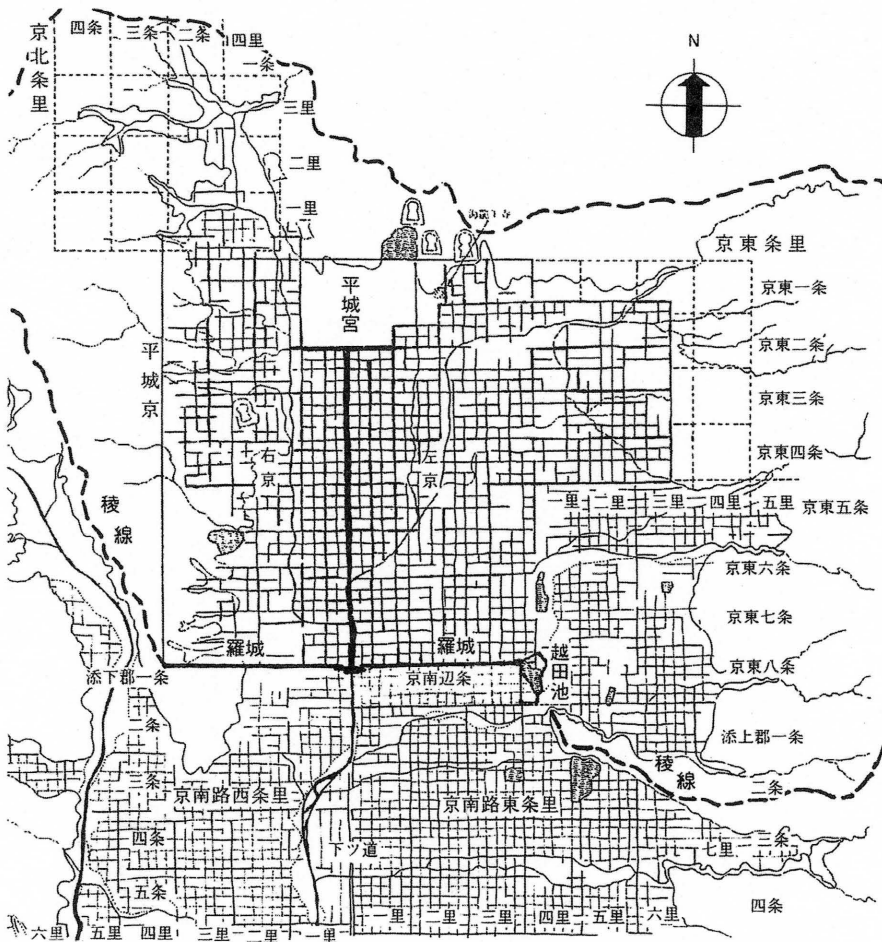


図 17 平城京羅城復元図



(井上和人「平城京条坊と条里地割再説」『条里制古代都市研究』15 1999付図に加筆作成)

図 18 阿部義平氏による「平城京の羅城と山丘陵線の結合」図

することとなろうが、しかし、平城京周辺の丘陵地帯に羅城に比肩しうる稜線を備えた場所が確認されているわけではなく、なお検討を必要とする。

羅城および羅城門は大陸式都城にあって、外から参入する場合に、視覚的に真先に映じる建造物である。長安城にあって、明德門の規模は羅城に開く他の門よりも群を抜いている。そして両側に延々と羅城が連なる明德門を入れてまず目にするのは、幅が 150m を超える朱雀街が皇城の正門朱雀門までの 5.2km をまっすぐに通じている巨大な人工的景観である。しかし藤原京には羅城、羅城門、広大な朱雀大路のいずれも整えられていなかった。この点にこそ、藤原京を廃棄し、平城京を建設しなければならなかった理由があると考えるのである。

越田池と曲江池 藤原京には無く、平城京で初めて認められる長安城に類似ないしは共通したいくつかの事象があることは、かねてから指摘されてきたところである。長安城の東南角には、差しわたしが 1.5km に及ぶ曲江池が遺跡として残されている。曲江池は皇帝の離宮であった芙蓉園の苑池であった。同様に平城京の東南角には、こんにち五徳池と呼ばれる、長径 500m の大きな池がある。池の形状は奈良盆地に多く見られる灌漑用溜め池として中近世期に盛んに造成された方形の皿池ではなく、不整形をなしている。『日本霊異記』に「^{こした}越田池」としてみられ、奈良時代には存在していたと考えられる。越田池を含めて西方に確認される「平城京京南辺特殊地区」と仮に呼ぶ一定の区画が、皇室ないし、奈良時代の政権の枢要な氏族であった藤原氏と密接な関係をもっていたと推定されることや、池の長軸方向が曲江池と同じであることなどから、平城京造営に際して曲江池および芙蓉園を意識して、越田池そしておそらく離宮が造営されたのではないかと考えている（岸 1974・井上 1998）。

松林苑と西内苑 平城宮の北側には、なだらかな起伏を持つ平城山丘陵が展開するが、平城宮に北接する一画に、「平城宮園林」の一つである松林苑（史料では松林宮とも表記される）がある（金子 2003）。全周について確認されているわけではないが、周囲を築地塀で囲んだ広大な範囲におよぶと想定されている。これは長安城宮城域の北にある西内苑に相当する園林区画であるとみてよいだろう。そうすると、この松林苑は、長安城の西内苑がそうであったように、北側からの外敵の攻撃を緩衝するための空間という性格を、たとえ象徴的な意味合いであったとしても、付与されていたとみられる。

二つの朝堂院と東院 平城宮には国家的儀式や政務などを執行する朝堂院区画が宮域の中央とその東側の 2 ヶ所に設定されている（図 20）。これは藤原京にはなかった状況である。藤原宮では朱雀門、朝堂院、大極殿院、内裏が正方形の宮域の南北中軸線上に配置されていた（図 21）。ところが平城宮は正方形ではなく、東に

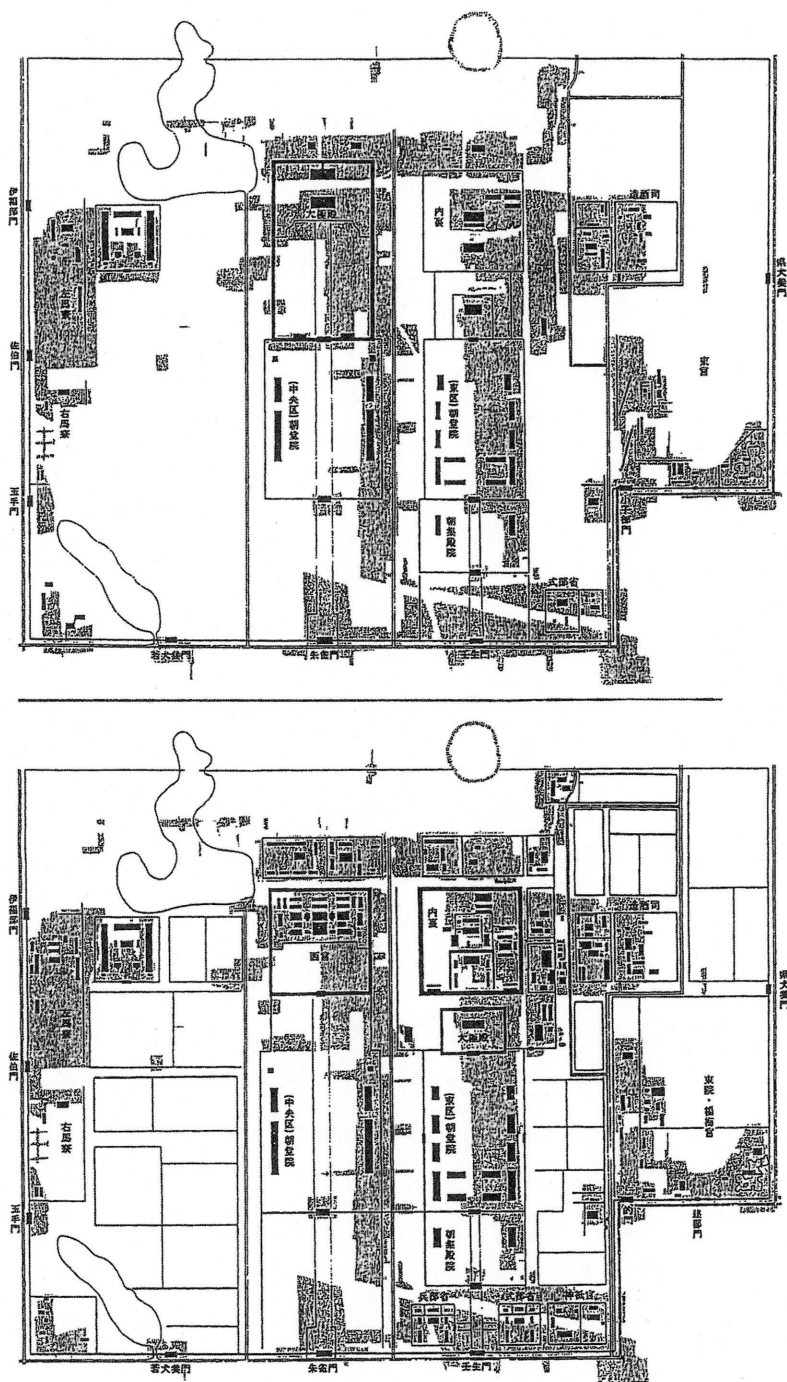


圖 20 平城宮域圖〔上：奈良時代前半期 下：奈良時代後半期〕

- ・宮衙区画は遺存地割に基づいて推定したものを含む。
- ・アミ部分は既発掘地。
- ・表示した諸建造物等は必ずしも同時点に存在していたものではない。

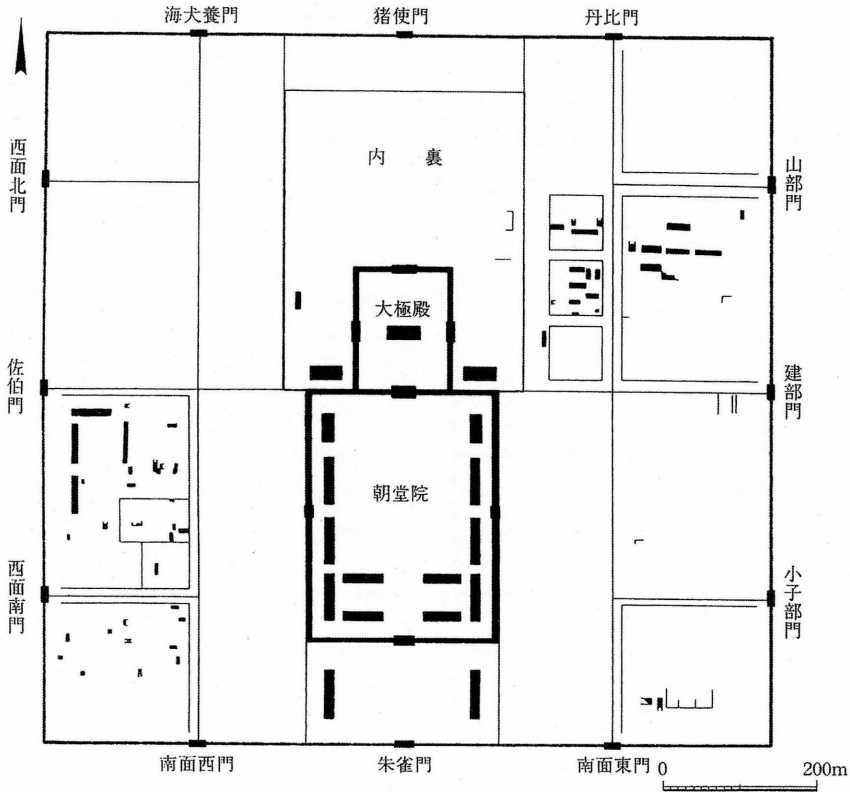


図 21 藤原宮域図 (小澤 2003)

張り出し部分が設定されている。この異形の形態をとることの意味については様々な説明が行われているが、藤原宮には一つであった朝堂院が、平城宮では朱雀門の北と宮南面東門である壬生門の北の2ヵ所に並立する形で造営されたことにより、宮域内の必要面積の不足を招いたことが大きな理由の一つであると考えられている。その他にも、平城宮の東に接して6坪以上の広大な宅地を構えていた、平城京造営の実質的な主導者である藤原不比等邸に宮域を直接させるため、あるいは不比等邸と東院を東西に並列する神的空間に見立てて、そこに王権を象徴する神話的な意義を見出そうとする見解など (上山 1977) もあるが、そうではなく、第一義的には、この張り出し部分にもっぱら東宮 (東院) を設定するためのものであったのではないかと考える。

東院のこの配置状況は、長安城の宮城にあって、中央に皇帝の宮殿である太極宮を置き、西側に後宮としての掖庭宮、東側に皇太子の宮殿である東宮を配置していたことに共通する。平城宮では、しかし、長安城の太極宮に相当する内裏、東区朝堂院に東接する位置は、現・水上池から南下する谷地形、つまり湿潤地に当たって

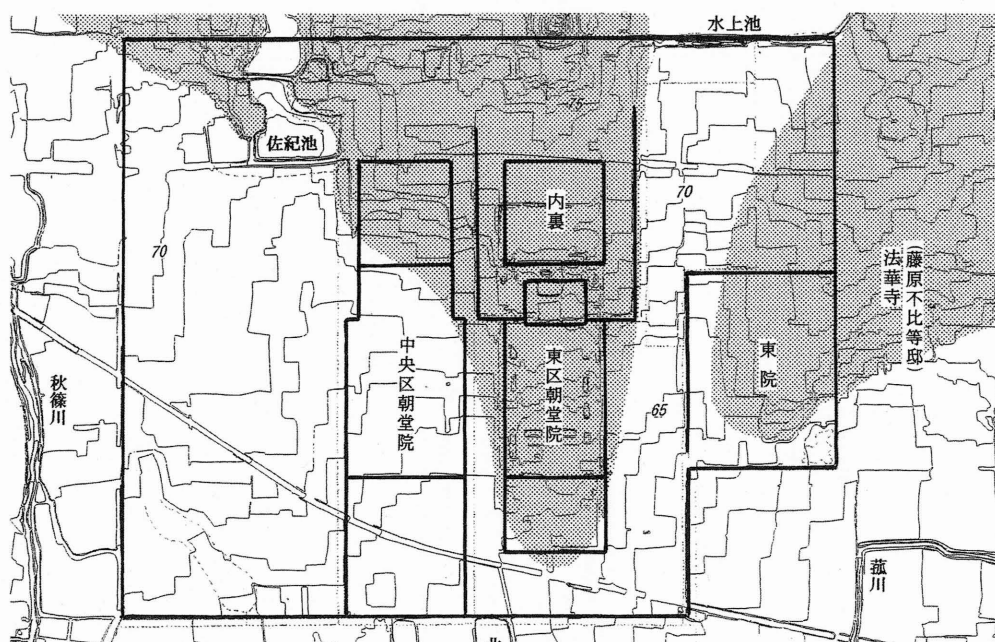


図 22 平城宮周辺の現況地形図

おり、そこに宮殿域を営むのは適当でない。その谷筋に東接する高燥の地は、まさに東院の立地する支丘上に他ならない（図 22）。

さて、平城宮での東西二つの朝堂院は平城京造営当初に、すでに設定されていた。朱雀門北の中央区朝堂院は、奈良時代を通じて東西各 2 棟の礎石建ちの長大な瓦葺き建物で構成され、壬生門北の東区朝堂院は、奈良時代前半期にあっては東西各 6 堂の殿堂は瓦葺きではなく、檜皮葺きの掘立柱建物であったことがわかっている。

この二つの朝堂院併存という状況は、長安城における太極宮と大明宮を意識したものと思われる。唐朝初期には主たる儀式は太極宮で行ったが、高宗の龍朔 2 年（662）に太極宮の東北に大明宮が修建され、以後即位や朝賀など大礼に属することは太極宮で、その他の儀式は大明宮で行ったことを受けて、平城宮では中央区朝堂院正殿である（第 1 次）大極殿が元日朝賀や即位式、外国使節謁見などの大儀、中儀にあたる儀式を行い、東区朝堂院はその他の儀式および日常の政務のための空間という機能分化を実現したものと考えられている（奈良国立文化財研究所 1993）。もちろん、東区掘立柱朝堂院の造営は、藤原宮にはなかった、それ以前の宮室にまでさかのぼる、いわば復古的な現象であり、天皇の神権確立の場であったなどとの評価も無視しえない。しかし、第 1 次大極殿前の段差 2 m に及ぶ埴積擁壁は、明らかに長安城大明宮含元殿前の壮大な龍尾壇を模倣したものであり、平城宮造営に際して長安城の形制を積極的に導入しようとした側面をここでは強調しておく。

1-5. 平城京の形制（その3）－すべては長安城を指向して－

平城京の朱雀大路が長安城朱雀街の2分の1の規模を意識して設定されたものであったと考えられることは、すでに述べた。平城京を造営するに際して、朱雀大路を広大なものに作りあげるには、物理的には長安城に匹敵する、あるいはさらに凌駕する規模の道路占地も決して不可能ではなかった。しかし、実態として半分の幅員に設定したという事実は、重要であろう。その点にこそ、当時の唐と日本の国家間の政治的関係を顧慮したことが、いみじくも表現されていると考える。このことは、京城全体の形態のありようを通じて、いっそう鮮明に理解される。

平城京の全体形 平城京は、既述のように、南北9条(4,789.8m)、東西8坊(4,257.6m)

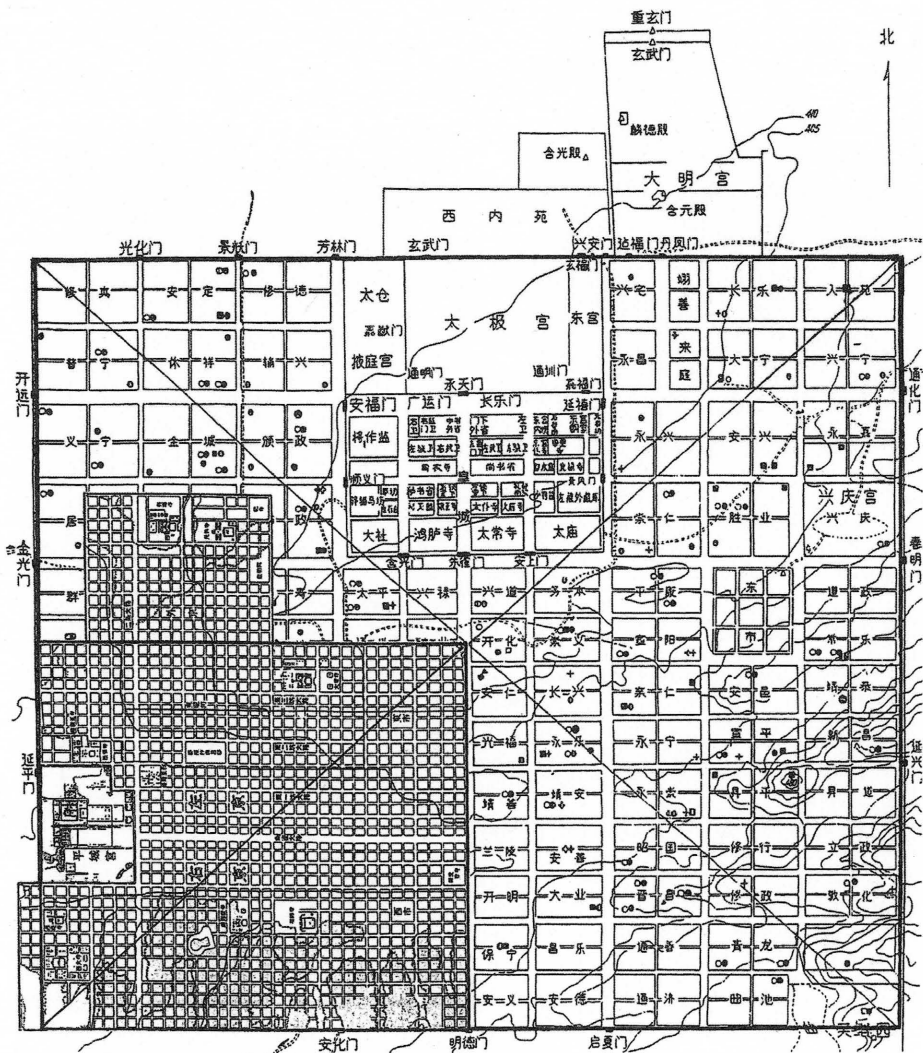
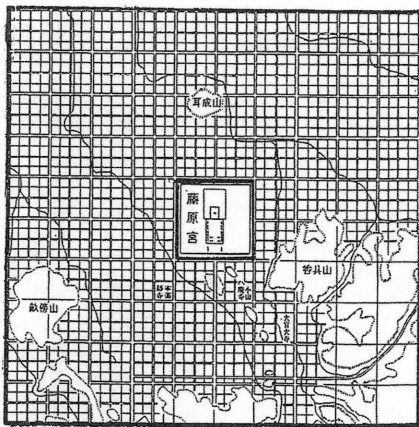
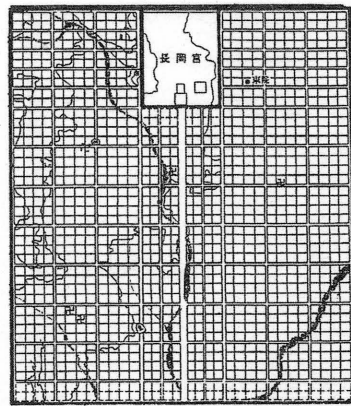


図 23 長安城と平城京 1:100,000

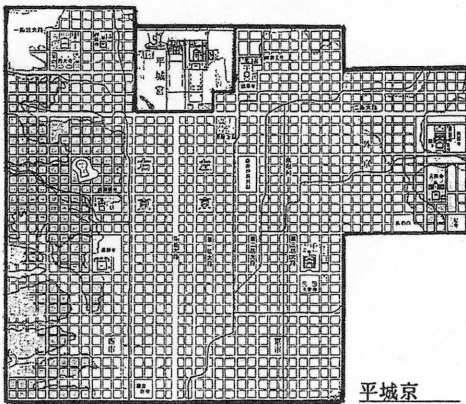
一東へさらに3坊分外京として張り出す)の、南北に長い方形をとっている。長安城が東西10坊(9,721m)、南北13坊(8,651.7m)であり、東西に長い方形であった(中国社会科学院 1963)こととは逆であることの意味は、従来様々に考察されてきているが、断案を得るには至っていない。しかし、注目すべきことに、都城域の南北と東西の比率をみると、平城京が100:88.9であるのに対し、長安城が89.0:100であることがわかり、両者はほぼ完全な相似形の関係にあることがわかる。しかも、なおさらに興味深いことに、〔長安城の短辺(南北長)〕:〔平城京の短辺(東西8坊分の長さ)〕が100:49.2, 〔長安城長辺(東西長)〕:〔平城京長辺(南北長)〕が100:49.3であり、平城京の計測値が京極の条坊計画線を基準にし、長安城のそれは外城壁での計測値であると報告されていることを勘案すると、長辺:短辺は100:50であったとみてよからう。つまり、平城京は長安城の全体形を、長さにして正確に2分の1に縮小した形で90度回転させて京城の規模と形態を決定したもので、従って面積は正しく



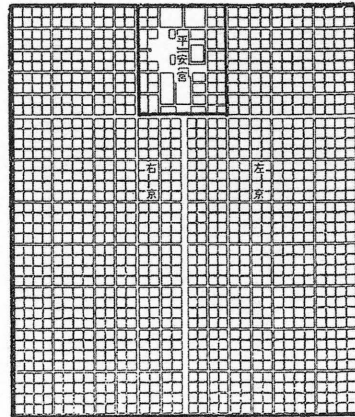
藤原京
(694~710)



長岡京
(784~794)



平城京
(710~784)



平安京
(794~)

図24 日本古代都城変遷図 1:100,000

4分の1となる。平城京ではその本京部分に外京城を付加した都市計画であり、きわめて明解な設計の原理であったのである（図23）。

平城京に先行する都城である藤原京は10条×10坊の、約5.31km四方の正方形をとり、藤原宮はその中央に2条2坊の方形域を占めていたが、平城京では、街区つまり坊や坪の規格や条坊の設定方式は共通するものの、京城の形状、宮域の設定地ともに著しい改変が加えられた。そして、平城京の京城、形制、つまり南北9条、東西8坊の規模、形態は、その後の長岡京、平安京にも基本的に踏襲されることになる（図24）。平城京造営にあたって、藤原京とも、また手本としたはずの長安城とも異なる、南北に長い形態をなぜ採用することにしたのであったか。

隋大興城と唐長安城 長安城を初めとして、古代における都城は、政治権力の表徴の場としての意味をもっていた。581年に即位した隋文帝は、漢代以来の長安城を廃棄して、そのすぐ東南の龍首原と呼ばれる丘陵地帯に、未曾有の大規模な都城である大興城を新たに建造した。次の王朝である唐は大興城をそのまま継承して、名称を長安城と変えた。大興城は582年6月に建造が開始され、翌年の583年3月には基礎工事を終えた。わずか9ヵ月間という短期間で工事を進めたのは、突厥との臨戦状態の中で新都の建設を遂行しなければならなかった、当時の緊迫した政治情勢を背景としていたからであったと説かれる（妹尾 1999/2001）。これまでになかった、まったく新しい都城、大興城をなぜ築く必要があったのかという点については、妹尾達彦氏によれば、軍事、治安機能の強化、効果的な王朝儀礼演出の必要性、旧長安城の建築物の腐朽の進行、旧長安城の自然環境の悪化、旧長安城内で、前王朝である北周の皇族、宇文氏一族を殺害したことの祟りへの恐れなどの理由があったことが指摘されている。さらに妹尾氏の指摘を引くならば、隋の大興城すなわち唐長安城は、長い間南北に分裂していた中国を再統一した隋・唐が、皇権の正統化を図るために、支配の正統性という観念や支配者の想定する秩序を、目に見える形に置き換える王朝儀礼を挙げる主要舞台として建築したものであった。

平城京の京城 長安城における幅150mないし155mの朱雀街は、人馬や車駕が通行する道路としての機能をはるかに超越している。その極端な壮大さをもって、人々をして視覚的に圧倒させるべきものであったとみてよかろう。もちろん、都城の正門である南面羅城中門（長安城にあっては明德門、平城京にあっては羅城門）もまた、入城しようとする人々に対して威圧感、畏怖感を与えるにふさわしい巨大さを付与されるべき構築物であった。朱雀街・朱雀大路がこうした機能をもたされていたと前提するならば、平城京造営に際しても最大限、大規模に設定すべきであっただろう。

平城京の京域内には、宮域の4.75坊分を除くと、合計79.25坊があった。いっぽう、藤原京は10条×10坊で、宮域4坊を除くと96坊であったことになるが、京城

内には天の香具山、耳成山、畝傍山の大和三山や飛鳥北端の急峻な丘陵地域など、地形的に、おおむね 16 坊ないし 18 坊の地形上の非可住域があった。平城京もまた、とくに右京域は丘陵地帯にあるが、地形や遺存地割を追究すると非可住域は 3、4 坊ほどであったと判断される。つまり、藤原京、平城京ともに、可住域は 75 ないし 80 坊前後であったことになり、平城京建設に際しては、可住域を藤原京に準じさせて京城の広さを決定したと推定する。平城宮域を京城北端に設定したのは、いうまでもなく長安城の形制に則ったものであったに相違ないが、東西に地形的な制約がある中で、南北に長い京城としたのは、長方形の縦、横の比率は長安城に合わせつつも、朱雀大路をできるだけ長く設定して、平城京の視覚的な威厳さをより強化しようとの意図に基づいたものであったと考えるのである。

2. 新羅王京と渤海上京龍泉府の形制の実態

平城京が造営され、存続していた 8 世紀において、東アジア世界を構成していた国家は、唐と新羅、渤海そして日本であった。唐は、いうまでもなく、他を圧倒する強大な帝国であり、その動向は常に周辺国家の命運を左右するほどの影響力を発揮していた。また、他の 3 国は、それぞれの華夷思想に基づく国家秩序および国家権力維持を企図しており、複雑かつ熾烈な国際関係が現出していたことは、多くの研究により明らかにされている。

そうした政治状況の中で、都城の建設がどのような位置を占めていたのかについての考究は、まだ十分に深められているとは言い難い状況にあると考えている。その大きな原因の一つは、7、8 世紀における東アジア諸国家の都城の実態について、必ずしも明確にされていない点にあることを指摘する必要がある。

新羅王京 新羅の都城である王京(金京・慶州)の形制に関する見解は、1920 年代、30 年代の日本の研究者による復元案の提示を嚆矢とするが、本格的な復元研究は 1970 年代以降活発になり、さまざまな復元案が提示されている(図 25)(山田 2002)。しかし、まだ確定的な王京形制案を共有するには至っていないのが実情であり、近年広範に展開されている、王京内での発掘調査成果の分析研究の進展に待たなければならない。ただし、そうした中で、李恩碩氏の「新羅王京の都市計画」に示された所見は興味深い。

李氏は、従来史料分析の側から主張されている、5 世紀代に新羅都城の整備が実現したという見解に対して、発掘調査資料をもとに再検討し、王京中枢部での都市計画の着手は 6 世紀第 1 四半期以後のことであり、本格化する時期は 6 世紀半ば前後とした。但し現況では京城の四至もまだ確定されておらず、また、想定京城の東半部に所在する北川の両岸域において、20 度北で東に偏向する遺構群や遺存地割群

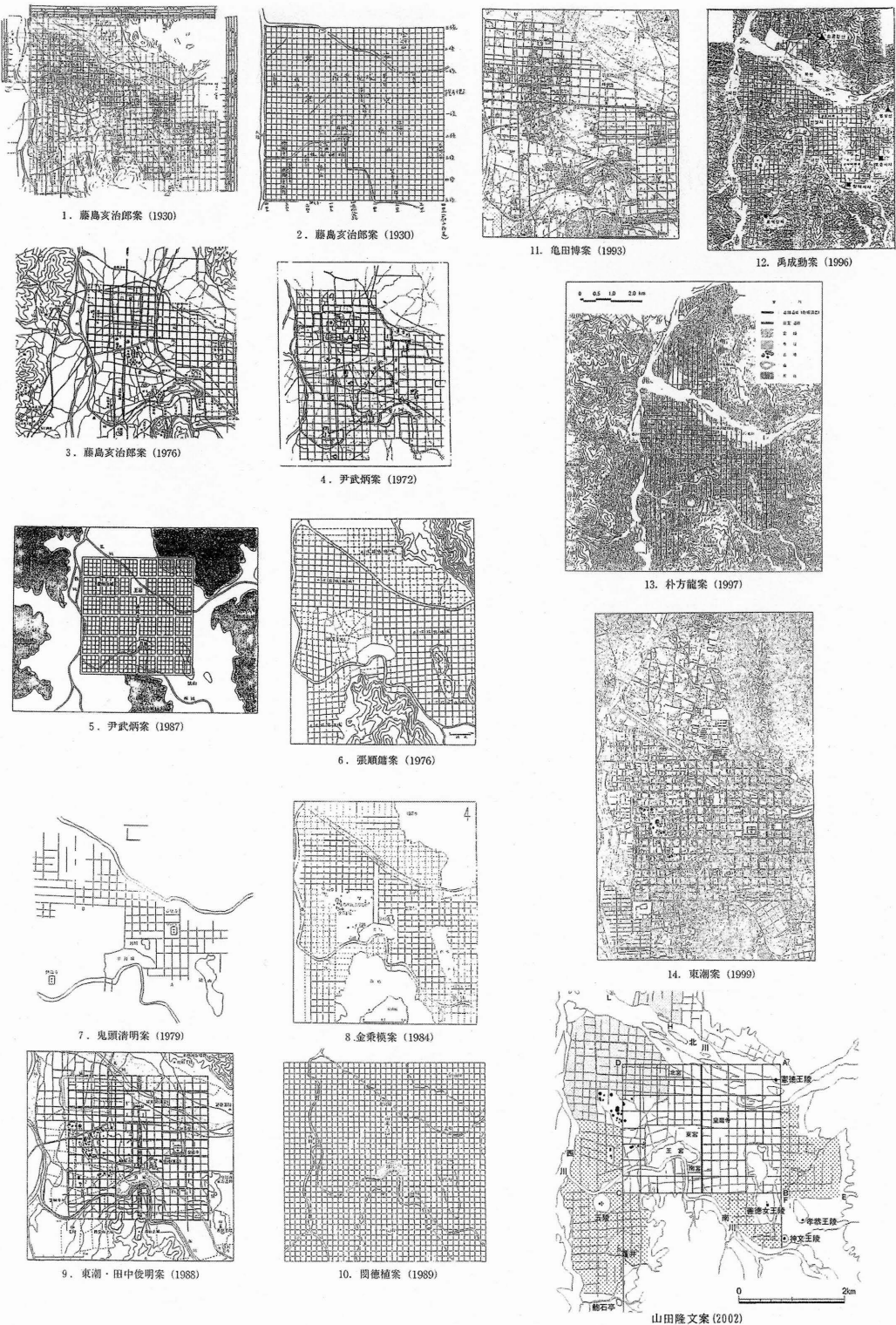


図 25 新羅王京(金京)復元諸説図(縮尺不同)(山田 2002)



図 26 新羅王京の遺跡・地割図 (李 2003)

が認められるなどの状況から (図 26), 李氏は「新羅王京の造営は, 発掘調査の成果を踏まえれば, 一貫した計画に基づいて進められたのではなく, 年代の経過に伴って次第に範囲が拡大し, 8 世紀代に完成に至ったと判断される。このように当初から定型化した都城スタイルが採用されたのではなく, 継続的に拡大し, しかも自然地形に規制される形で造営された結果, 多様な構造が統合された形になっているところに, 新羅都城の特徴をみることができる」と総括する (李 2003)。

こうした見解を是とするならば, 新羅王京の造営の歴史的経緯や意義を, 白紙の状態の土地に人工的な都市建設が実施された平城京や, 次に言及する渤海の都城, 上京龍泉府などと同次元で論じることとはできない。李氏もいうように, 「新羅は千年の間 (BC57~AD935), 一度も遷都せずに, 慶州地域の盆地内に都城を維持してきた」のであり, 様々な歴史事象の展開の形跡が王京遺跡に複雑にかつ重層的に残されていることは容易に想定できる。それだけに発掘調査の遂行, そしてその成果の分析には多くの困難さが付随するものと思われる。従って, 新羅王京について論及するには, 今すこし時の経過を待たなければならない。

渤海上京龍泉府 渤海は 668 年に唐の侵攻により滅亡した高句麗の遺民が, 30 年後の 698 年に再興した王国で, 926 年に契丹の攻撃で滅びるまでの間, こんにちの

中国東北地方、ロシア沿海州、朝鮮半島北部を領有していた。首都は、当初「旧国」にあったとされている。その後、中京顕徳府に遷都し、さらに8世紀の中ごろに上京龍泉府を造営して、首都とした。渤海には、盛期においてはさらに東京龍原府、西京鴨緑府、南京南海府を加えて五つの都が置かれていたが、最も重要な地位を保っていたのは上京龍泉府であった(図27)。

上京龍泉府の形制に関しては、1930年代に行われた日本の東亜考古学会による発掘調査研究を通じて、初めて復元案が提示された(図28)(東亜考古学会1939)。その後1963年から1964年にかけて中国と北朝鮮の合同調査が実施され、その成果に基づく復元案が公表されている(図29)(中国社会科学院1997)。しかし、1992年に千田稔氏(図30)(千田1992)、2002年には小方登氏による新たな復元案(図31)(小方2002)が提示されるにおよんで、詳細に表現されている中朝合同調査による復元案に再検討の余地のあることが明らかにされつつある。

詳論は別稿(井上2005c)にゆずるが、私は、上京龍泉府の形制についての、より確実な復元案構築を企図して、アメリカの宇宙衛星コロナにより1964年10月9日に撮影された衛星写真をもとにして、上京周辺の仮地形図を作成した(図32)。また、中朝合同調査隊の測量成果の解析を通じて、上京の造営に使用された尺度が1尺=29.34cmであることを措定し、これまでの発掘調査で明らかにされている宮殿、官衙、寺院遺構のいずれも、その造営尺で設定されていることを明らかにした。この造営尺を基準尺とみなして、仮地形図に現れている諸々の遺存地割を分析した結果、上京龍泉府の都市計画の中に、平城京の形制の基本的な要素が、少なからぬ局面において採用されていることが判明するに至った。

ここでその骨子を述べると、上京龍泉府の条坊街区、道路の設計の基本方格は1,800尺[528.1m]の方眼線であり、道路の中軸線は、この方格線上に設定されている(図33)。つまり、道路が広く設定されていれば、隣接する街区の幅は狭くなるという、日本の古代都城のうち、藤原京、平城京で採用されていた「分割方式」が採用されている。また1,800尺方眼の基準方格は、平城京(そして藤原京)と一致している。あるいは、上京龍泉府は、中央南北道路(長安城に準じて「朱雀街」と仮称されている)を中軸として東西に1,800尺の方格を4区画ずつ配置するが、この状況も平城京と同じである(図34)。

さらに、上京の宮城と皇城を合わせた区画は、都市街区部を外城と呼ぶのに対して内城と総称されるが、この宮殿および官衙からなる東西幅3,600尺の内城区画は、平城京では東西幅が同じ3,600尺である平城宮に相当する。上京の内城は南北に長い長方形を呈し、いっぽう、平城京は3,600尺四方の宮城の東辺の北4分の3が900尺東に張り出すという、変則的な平面形をとる。ところが、双方の面積を算出する

と、上京が1,548万平方尺、平城宮が1,539万平方尺であり、比率にして1,006:1,000となり、まったく同じといっても過言ではない。ことこのように、上京龍泉府と平城京との間に、偶然の一致とは見なしがたい事実関係が存在していたことが明らかになってきた（図 35）。いっぽう、都城の表徴的な存在である朱雀街は、幅が360尺〔105.6m〕であり、平城京の300尺を凌駕するが、街路の総延長でみると、上京は平城京の朱雀大路の57%ほどでしかない。（なお、中国の研究者により提唱されている上京龍泉府段階的の造営説—まず宮城の一

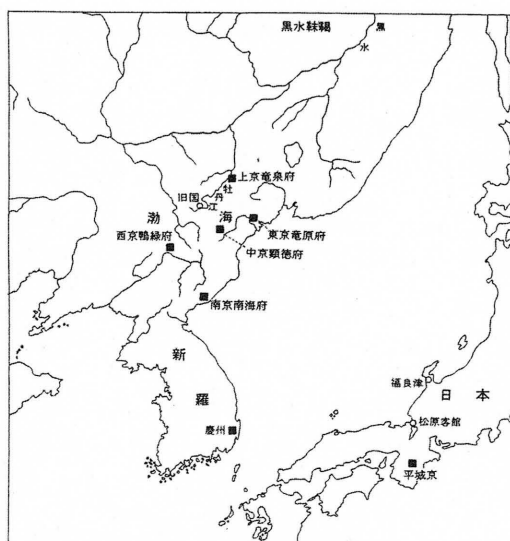


図 27 渤海五京位置図

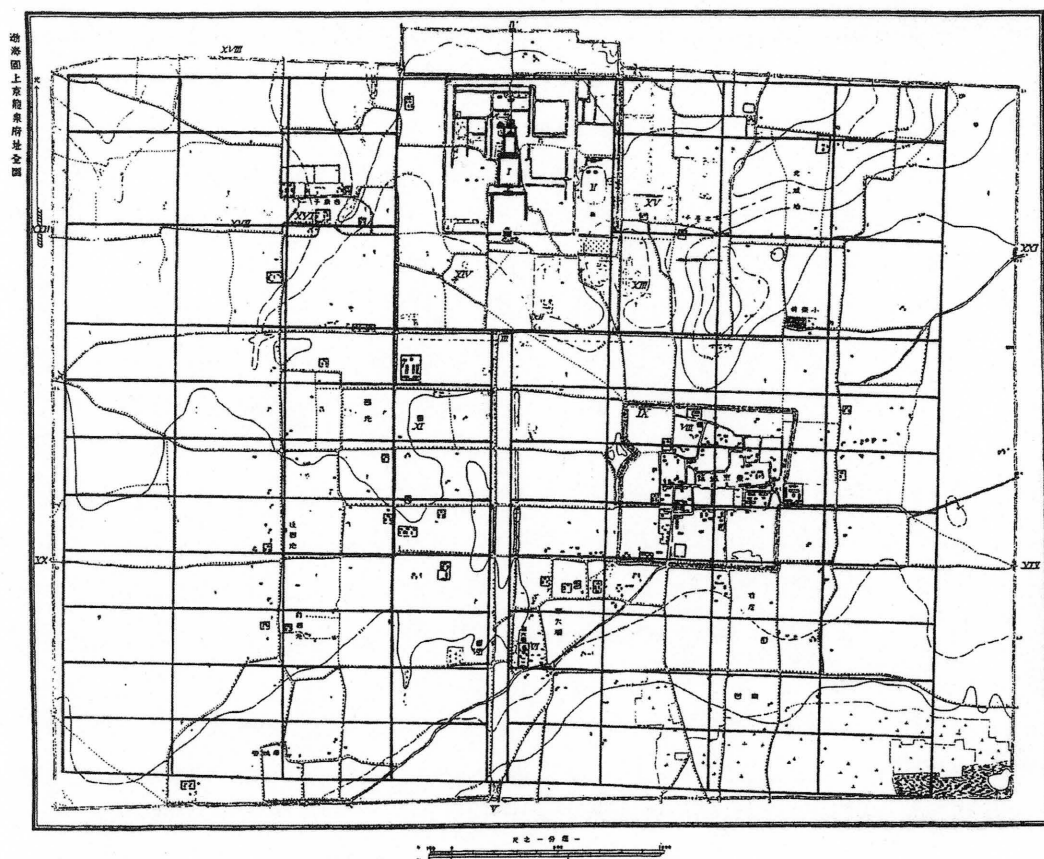


図 28 『東京城』所掲の上京龍泉府周辺地形図と形制復元図（東亜考古学会 1939）

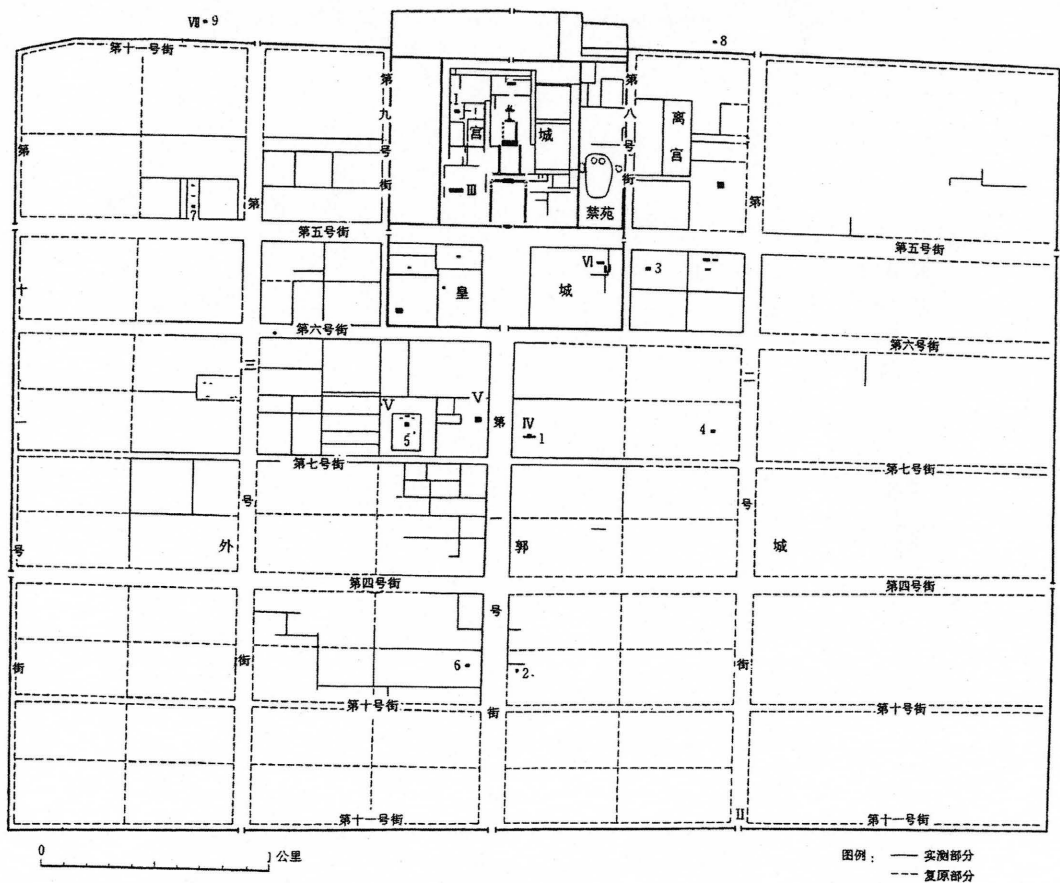


図 29 中朝合同調査による上京龍泉府形制復元図 (中国社会科学院考古研究所 1997)

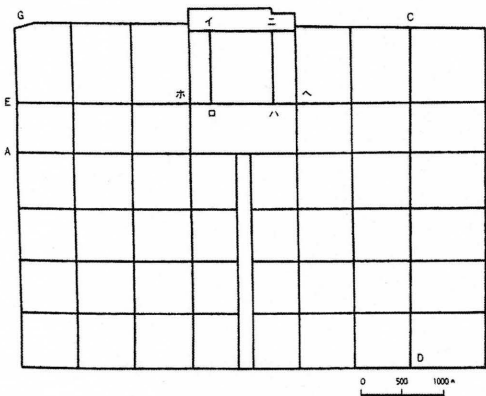


図 30 千田稔氏による
上京龍泉府形制復元図 (千田 1992)

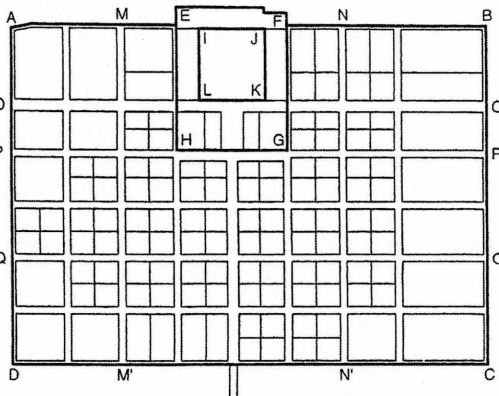


図 31 小方登氏による
上京龍泉府形制復元図 (小方 2002)

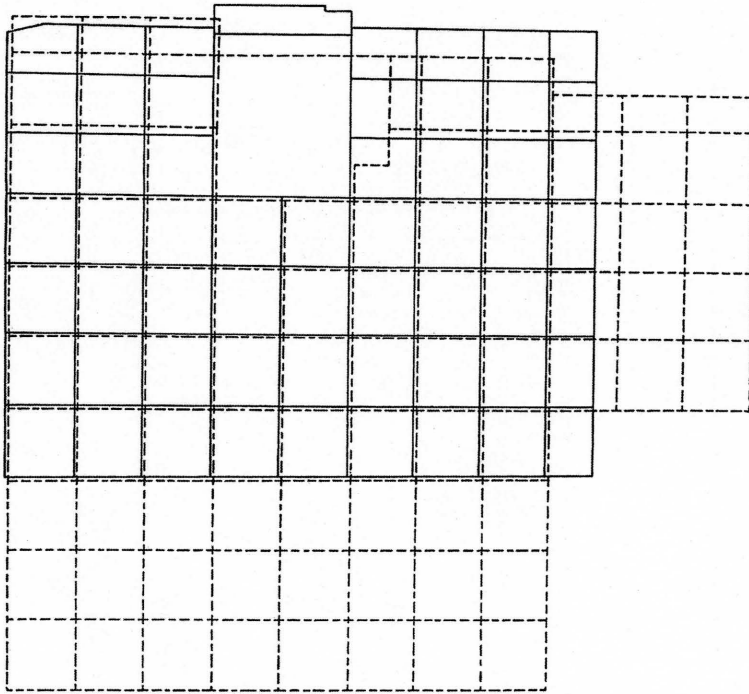


図 34 上京龍泉府と平城京（点線が平城京）

部が造営され、その後、時を距てて皇城域が作られ、都市街区つまり外城が造営されるのは、さらに遅れるとする考説（劉・魏 1987/1991）——は、内城域の設定状況を分析することによって、成立し難いことが実証された。つまり、上京は内城、外城を合わせて、一連の造営計画のもとに建設されたと判断すべきと考えられるのである。）

もとより、上京龍泉府の形制の中で、内城が宮城と皇城とで構成され、宮城内に第1宮殿から第5宮殿までが中軸線上に南北に並んで設定されている点は、平城京ではなく長安城に類似しているし（図 36・37）、皇城内を東西に分かつ幅 700 尺〔205.4m〕の広大な空間は、長安城皇城の承天門街と共通した様相を示している。また、都城全体の形状は東西に長く、長安城に近い。従って、約言すると、上京龍泉府の基本的な形態は長安城を規範としながらも、設定方式は平城京に相通じ、宮域の広さや京域の基本的な東西幅も、平城京とまったく同じといえるほど同規模に設定されている。しかしながら、朱雀街と朱雀大路の比較からは、ある部分は平城京に勝り、ある部分では小規模に作るという、一致はしないものの、拮抗した状況をみてとることができる。

上京龍泉府は、史料の上では 754 年頃に中京顕徳府から遷都したとみえるので、平城京の造営が上京に先行したことは間違いない。そうであるとすると、上京龍泉

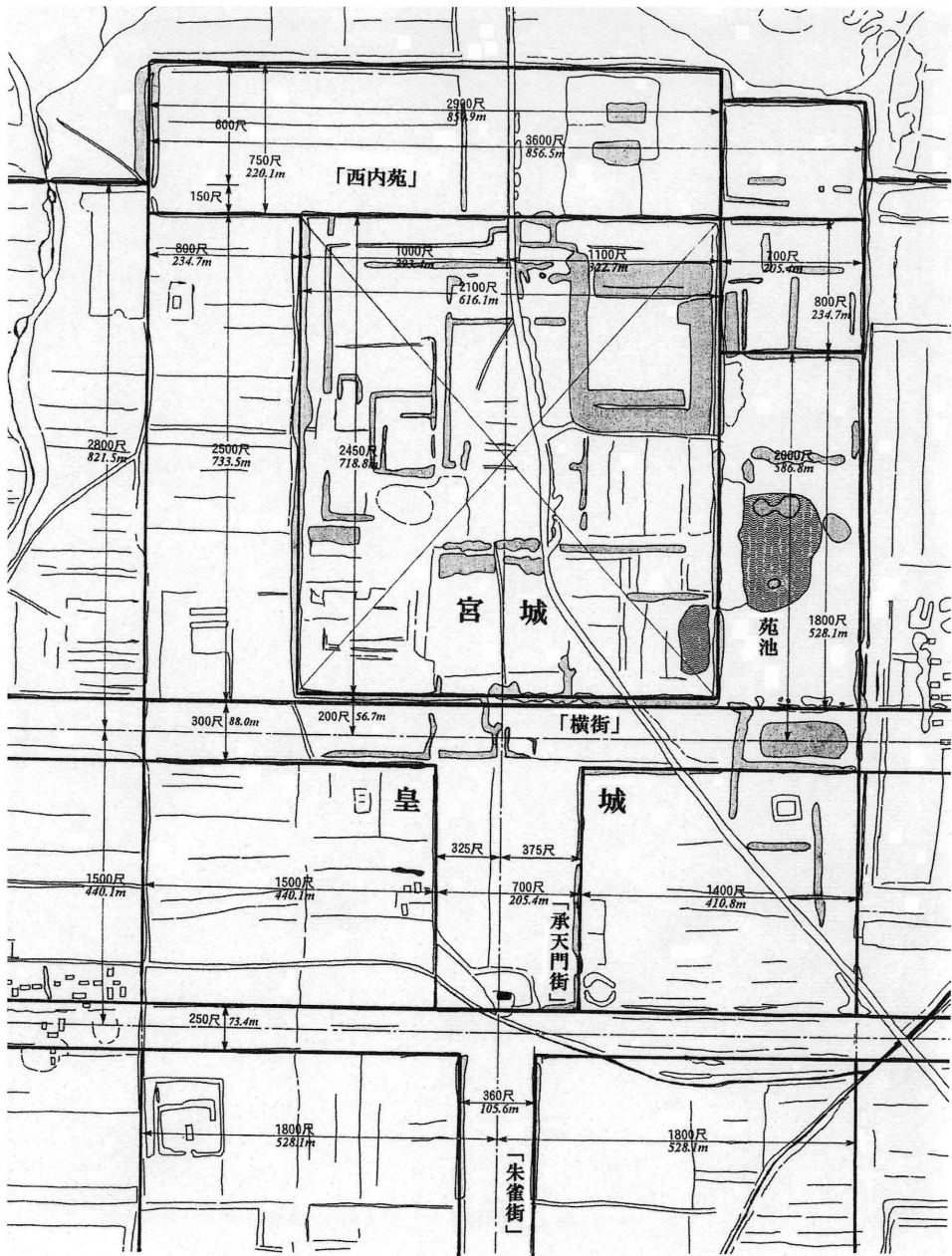


図 35 上京龍泉府内城設定寸法復元図 (1 尺=29.34cm)

府に認められる平城京の色濃い要素を，相互に無縁ものとして等閑視するのでない限り，上京龍泉府の都市計画を立案した時に，平城京の形制のありようが多分に考慮されたと判断すべきであろう。

上京龍泉府が造営された 8 世紀半ば当時，渤海は唐の政治的圧力と新羅の軍事的

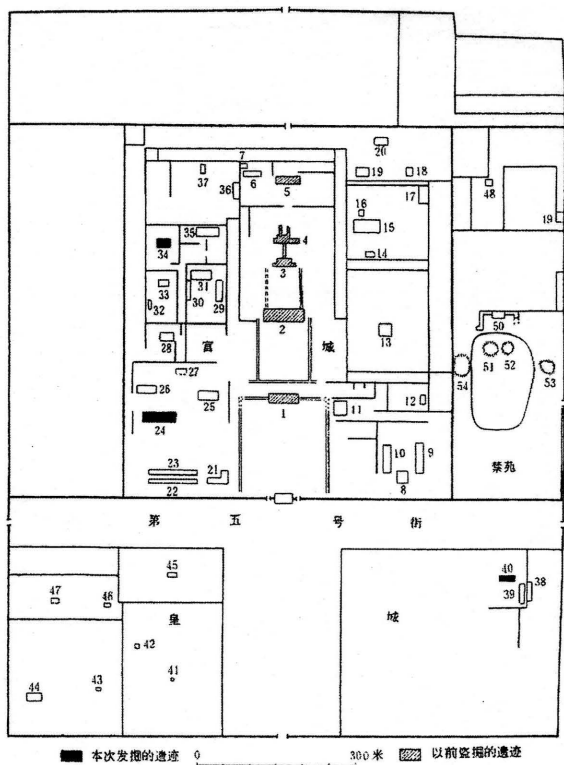


图 36 上京龍泉府内城建物
配置図
(中国科学院考古研究所 1997)
(1~5: 第 1 号宮殿~第 5 宮殿)

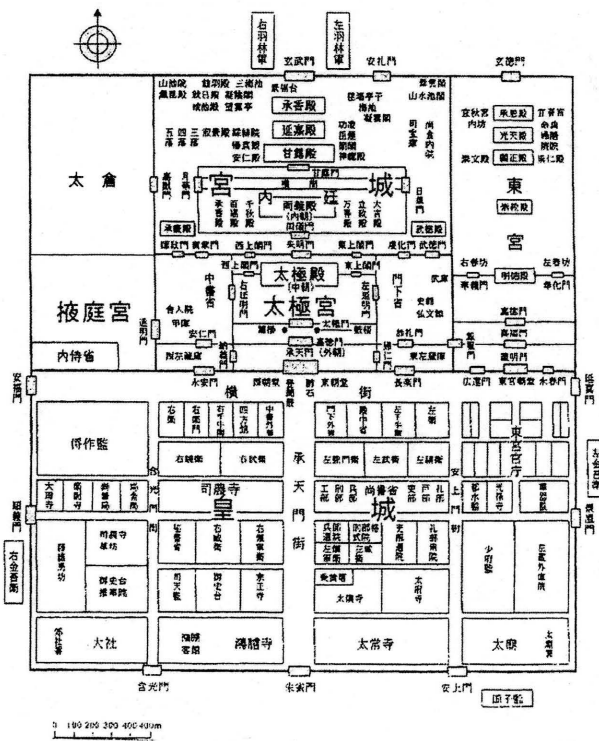


图 37 長安城宮城・皇城
(妹尾 2001)

圧力に挟撃されるという厳しい対外的状況にあった。日本に対する渤海の認識は、これまでの諸研究の成果に従えば、基本的には日本を同格に扱っていたものの、新羅が渤海を攻撃しかねないとの国際情勢に促されて、新羅を牽制しうる勢力として日本との提携を求めるというものであった（酒寄 1992）。それに応じた日本側の代表的な施策の一つが、藤原仲麻呂つまり恵美押勝が推進した新羅征討計画であった。したがって、渤海としては日本に対して外交上は辞を低くせざるをえなかったのであるが、根本的には、日本を同等、同格の隣国とみなしていた。いっぽう、日本側としては、渤海からの外交使節は、かつての高句麗からの朝貢の復活と位置づけ、渤海を蕃（藩）国として位置づけることによって国内権力の維持を図らざるを得ない状況にあった（西嶋 1985）。

つまり、当時、より北ないし北東の領域に版図を拡大しつつあった渤海が、唐、新羅、日本との複雑な国際関係の中で、自ら規定した華夷秩序のもとで国内統一を図るために、国家権力の威力と正統性を表徴すべき舞台装置として、唐や日本との外交関係に配慮しつつ造営したのが上京龍泉府であったと考える。

おわりに―国際関係と華夷思想に基づく形制理念の実現―

平城京の造営計画が公式に決定されたのは、和銅元年（708）2月15日の平城京への遷都の詔によってであり、それから2年後の和銅3年（710）3月10日に藤原京から平城京への遷都が挙行される。ただし、新都建設の動きは、その数年前から認められるという研究もあり（鎌田 1991）、さらに、藤原京を放棄し、新たな都城を建設しなければならないと判断した重大な契機は、大宝2年（702）に33年ぶりに派遣され、慶雲元年（704）に帰国した遣唐使の、長安城での見聞にあると考えている（金子 1994／1997・寺崎 2001・渡辺 2001・小澤 2003・井上 2003a など）。また、既述したように、710年の遷都当初においては、平城宮、平城京ともに、まだ完成していたとは言い難い状況であった。

藤原京は、天武天皇が壬申の乱（672）に勝利を収め、飛鳥浄御原宮に即位してまもない670年代に造営事業がはじめられたと考えられる。途中、天武自身の死による停滞など、さまざまな経過をたどったのち、天武の皇后であった持統天皇の694年に宮室の置かれた首都として成立する。藤原京の形制については、これまで述べてきたように、10条10坊四方の正方形であったとする見解が有力とみるが、その場合、藤原宮は京城の中央に設定されていたことになる。これは『周礼』考工記に記された理想としての都城形態に通じるものであり、あるいはまた天武の信奉した太極星を中心とする宇宙論に基づく王権思想を実現したものとの説明も可能かもしれない（中村 1996・小澤 1997）。いずれにしても、7世紀後半代に、唐の軍事的脅

威にさらされていた日本が、その危機的状況への対応策として、列島規模の統合した国家体制を構築せざるをえなかった状況のもとで、唐ないしは大陸国家が採用している国家統合理念あるいは方法を導入して藤原京の建設が推進されたものと理解している。

近時、藤原京造営の歴史的立場づけに関しては、上述した私見のような見解に対して、相対する見方も主張されている。それは、7世紀中頃からはじまった飛鳥の荘厳化、支配拠点の整備の結果、飛鳥に「京」が成立し、それをより荘厳にするために条坊制が導入された、とするもので、条坊制施工当初はその施工の範囲も定かには決めておらず、かなり時をおいて宮室の場所が決定されたのであるという見解である（林部 2005）。あるいは、文献的には「倭京」から「新城」、「新益京」などの複雑な変遷があり大宝令以前には左右京の分割、東西位置の設定、宅地班給、儀式の場の修練などの点で不十分段階であったとし、私たちが藤原京の初期段階の呼称と考える新城は、天武5年（676）ごろから飛鳥北方に倭京城を拡大したもので、不整形ながらも方格地割をとまなうなどと捉えられている（仁藤 2003）。これらの言説の論議は、なお多岐に及んでおり、別に批判的検討の必要があるが、当然のこととして、藤原京の次なる都城、平城京の造営の歴史上の立場づけも、私たちの理解とは異なっている。すなわち、対外的な要因よりも現実的な要因は藤原京のもつ多くの問題点にあったとし（林部 2001）、「日本的」都城から本格的「中国的」都城への脱却を意味する（林部 2005）、あるいは、とりわけ王族や豪族層の集住という点で藤原京は未熟であり、より広範な階層から京戸を位階制原理により構成し、豪族層を国家官僚化することが求められたからと説明するのであるが（仁藤 1999）、しかし、なにゆえにわずか10年ほどで藤原京を廃棄しなければならなかったのか、そして「中国的」な都城の建設を急がなければならなかったのであるかについての説明に欠けるのではないか。

なお、藤原京が、なぜ唐長安城の直接的な模倣ではなく、より古い、ないしは伝統的な制度を参考にしたのであるかについては、寺崎保広氏が次のように推測している。——藤原京建設計画が開始された時点では、300年の隆盛を誇った唐といえども、建国以来たかだか50年しか経っていない、いわば「新興国」であり、その前の隋王朝は強大であったにもかかわらず40年で滅びている。それ以前の中国大陸は南北朝時代で、いくつかの王朝が取ってかわる激動の時代であったのである。「この唐とて何年もつかわからない」と、当時の日本の関係者が考えたとしてもおかしくない。かくして、現に存在する唐の制度を参考にしたことはもちろんであるが、それは圧倒的な影響力を持つというものではなく、それ以前の制度なども含めて検討した結果である（寺崎 2001）。——傾聴に値する妥当な所見であると考ええる。

第7次遣唐使が派遣された702年から704年にかけての時期は、時あたかも則天武后の周朝の時代であった。武周革命ののち、首都は神都と改められた洛陽にあったが、則天武后は701年から703年の間長安城に滞在し、年号も701年に「長安」と改元され、長安4年まで続く。この時期、さまざまな問題をはらみながらも、国力は充実し、版図は拡大し、また文化的にも一つの頂点を迎えていた。こうした時代背景の中で、遣唐使の一行は長安城に入城したのである。

なおまた、702年に派遣された遣唐使の長安城での見聞が、藤原京の東アジア世界での都城としての限界性を認識させ、平城京の建設を急がせたとする私見などに対して、天武・持統朝以前には遣唐使の派遣は行われており、また遣唐使中断中にも長安城にかかわる情報は充分に入手可能であったとする批判がある（仁藤1999・林部2005）。もとより33年の間、遣唐使派遣が途絶していた期間にも、様々な形で海外の情報はもたらされていたことは間違いない。しかし、なによりも重要な点は、遣唐使は天皇政権が公式に派遣したものであり、たとえば、執節使（長官）であった粟田真人は大宝律令の選定に関与し、大宝元年（701）には直大貳（従四位相当）民部尚書（民部卿）を勤め、さらに参議をも兼ねていた、いわば政権の枢要な存在であった。国家の経綸を担うべき立場にあった人材による直接の見聞を通じての判断であったことを考慮しなければならない。そして、平城京が長安城の正しく2分の1の規模に設定されているという事実は、国家間の情報の授受として、正確な長安城の寸法が、そしておそらく詳細な都市設計図のような資料が、国家間のレベルで伝授されていたこと意味すると考えられる。

京城全体の面積としては平城京よりも広大であった藤原京であるが、幾多の局面において唐の長安城に比べると異なっており、欠落した構成要素があり、また貧弱であった。都城の造営が国家秩序の実現のために不可欠であるとの当時の統治観のもとにあって、藤原京の形制では国際的に通用しないとの危機感を抱かざるをえなかったのではないかと考える。国内的にというよりもむしろ対外的に、もはや通用しえないとの認識に立って、唐長安城を規範にした都城の造営を企図するに至ったのであったろう。その切実さは、遷都後わずか10年ほどで早くも藤原京の廃絶を決断し、あるいは未完成の平城京に遷都を強行するという性急な施策の展開ぶりに如実に示されているのではないか。

平城京は、唐帝国の皇帝権力に天皇の権威をなぞらえるという華夷思想に基づいて、国威を発揚すべき舞台装置として、藤原京の欠陥を克服する形で新たに建設されたものであった。日本は唐の冊封体制に組み込まれてはいなかったと考えられているものの、7世紀後半に朝鮮半島から日本列島に及ぶ領域で展開された唐の圧倒的な軍事的攻勢の中で、国家としての維持を図ってきた天皇政権の生き残りを賭け

た方策として、唐に極力配慮しつつも、蕃国と位置づけようとしていた他の諸国家、諸民族集団に対して皇権を十二分に誇示するべく設計されたのが新都平城京であった。

すでに言及したように、渤海上京龍泉府にあっても、その形制の解明作業を通じて、単に唐の都城形制を模倣していたのではなく、当時密接な政治的交渉のあった日本の首都、平城京の形制との微妙な相関関係が反映されていることが浮き彫りにされた。渤海にしても、日本にしても、古代における都城の造営は、このように厳然とした政治状況を背景として行われたのであるということを指摘して、本報告を閉じる。

(本稿は 2007 年度：国際日本文化研究センターの共同研究「古代東アジア交流の総合的研究」での報告に基づく。ただし同様の主題に基づく私の研究は、とくに 2002 年以来継続しており、本稿は 2005 年に公表した「東アジア古代都城の造営意義」と題する論考に若干の補訂を加えたものである。以後の私の研究の成果については、後掲する「井上和人古代都城関係論文リスト」を参照されたい。)

注

(1)大尺は大宝令雑令に規定された度地尺(土地測量用尺)で、小尺の 1.2 倍の長さを持つ。平城京造営当初の尺長は 1 小尺が約 29.57cm とみられるので、1 大尺=約 35.48cm として検討を進めることにしている(井上 2000・2003b)。ただし、大・小尺併用は平城京遷都後 3 年の和銅 6 年 2 月の格で解消され、以後は小尺のみの使用となる。小尺はこんにち天平尺と呼ばれ、大尺は高麗尺の謂いである。この大尺=高麗尺は虚構であるとする説がある(新井 1990・1992)が、従いがたい(井上 2003b)。

参考文献

- 浅野充 2004「古代宮都の成立と展開」歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第 2 巻 律令国家の展開』東京大学出版会。
- 東潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡 百済・伽耶篇』中央公論社。
- 阿部義平 2003「藤原京・平城京の構造」『古代王権の空間支配』広瀬和雄・小路田泰直編、青木書店。
- 新井宏 1990「古代尺度復元法の研究—よみがえる古韓尺と高麗尺への疑問」『計量史研究』12-1, 計量史研究会。
- 新井宏 1992『まぼろしの古代尺—高麗尺はなかった—』吉川弘文館。
- 井上和人 1984a「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第 41 冊。
- 井上和人 1984b「藤原京—新益京造営に関する諸問題—」『佛教藝術』154, 毎日新聞社。

- 井上和人 1998「平城京羅城門再考—平城京の羅城門・羅城と京南辺条里—」『条里制・古代都市研究』通巻 14 号。
- 井上和人 2000「平城宮造営尺長について」『奈良国立文化財研究所年報 2000-III』。
- 井上和人 2002「平城宮東院地区の造営年代—周辺条坊道路施工の実態から—」『奈良文化財研究所紀要 2002』。
- 井上和人 2003a「平城京の実像—造営の理念と実態—」『研究論集 X IV』奈良文化財研究所学報第 66 冊。
- 井上和人 2003b「平城京条坊道路の設定規格—大宝令大尺＝高麗尺説におよぶ—」『奈良文化財研究所紀要 2003』。
- 井上和人 2004a『古代都城制条里制の実証的研究』学生社。
- 井上和人 2004b「平城京朱雀大路設定規格の再検討」『奈良文化財研究所紀要 2004』。
- 井上和人 2005a「平城京右京北辺坊考」『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会。
- 井上和人 2005b「平城宮内の平面構造」『平城宮発掘調査報告 X VI 兵部省地区の調査』奈良文化財研究所学報第 70 冊。
- 井上和人 2005c「渤海上京龍泉府形制新考」『東アジアの都城と渤海』財団法人東洋文庫。
- 上山春平 1977『埋もれた巨像—国家論の試み—』岩波書店。
- 王金林 1988『奈良文化と唐文化』東アジアの中の日本歴史 2，六興出版。
- 小澤毅 1993「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会編。
- 小澤毅 1996「宮城の内側」『考古学による日本歴史 5』（政治），雄山閣出版。
- 小澤毅 1997「古代都市『藤原京』の成立」『考古学研究』44-3。
- 小澤毅 2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店。
- 小方登 2002「衛星写真を利用した渤海都城プランの研究」『人文地理』52-2。
- 橿原市教育委員会 1997「土橋遺跡の調査」『平成 8 年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会編。
- 金子裕之 1994「藤原宮」『古代都市文化と考古学』季刊考古学別冊 5，雄山閣。
- 金子裕之 1997『平城京の精神生活』角川書店。
- 鎌田元一 1991「郷里制の施行と靈龜元年式」『古代の日本とアジア』上田正昭編，小学館。
- 岸俊男 1969「宮域および京域の推定」『藤原宮—国道 165 号線バイパスに伴う宮域調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 25。
- 岸俊男 1974「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市編。
- 酒寄雅志 2001『渤海と古代の日本』校倉書房。
- 桜井市文化財協会 1997「上之庄遺跡第 4 次発掘調査の概要」『平成 8 年度奈良県内市町村

- 埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会編。
- 妹尾達彦 1999「中華の分裂と再生」『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』岩波書店。
- 妹尾達彦 2001『長安の都市計画』講談社。
- 関野貞 1907『平城京及大内裏考』東京帝國大學紀要工科第3冊。
- 千田稔 1990『宮都の風光』日本文明史3, 角川書店。
- 千田稔 1992「渤海国上京龍泉府—その歴史地理学的覚書き—」『奈良女子大学歴史地理学研究報告』IV。
- 武田和哉 2002「平城京跡発掘調査の成果と条坊制研究の課題」『条里制・古代都市研究』第18巻。
- 田辺征夫 2002「平城京の時代—遷都当初の平城京をめぐる一・二の問題」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所学報第65冊。
- 中国社会科学院考古研究所 1963「唐代長安城考古紀略」『考古』1963-1。
- 中国社会科学院考古研究所 1974「唐長安城明德門遺址発掘簡報」『考古』1974-1。
- 中国社会科学院考古研究所 1980『新中国の考古学』（関野雄訳），平凡社。
- 中国社会科学院考古研究所 1997『六頂山与渤海鎮 唐代渤海国的貴族墓与都城遺址』中国大百科全書出版社。
- 寺崎保広 2001「律令国家の源流」『古代宮都と飛鳥池遺跡』真陽社。
- 東亜考古学会 1939『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』。
- 中村太一 1996「藤原京と『周礼』王城プラン」『日本歴史』582。
- 奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所学報第40冊。
- 奈良国立文化財研究所 1993『平城宮発掘調査報告XIV』奈良国立文化財研究所学報第51冊。
- 奈良国立文化財研究所 1994『平城宮朱雀門の復原的研究』奈良国立文化財研究所学報第53冊。
- 西嶋定生 1985『日本歴史の国際環境』東京大学出版会。
- 仁藤敦史 1999「『藤原京』の京城と条坊」『日本歴史』619。
- 仁藤敦史 2003「首都平城京—古代貴族の都鄙観念—」『古代王権の空間支配』青木書店。
- 林部均 2001『古代宮都形成過程の研究』青木書店。
- 林部均 2005「飛鳥・藤原京の実像—「日本的」都城の成立—」『国際シンポジウム 東アジアの都市史と環境史—新しい世界へ—』日本学術振興会科学研究費基盤研究（S）「歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題」研究組織編。
- 八木充 1996『研究史 飛鳥藤原京』吉川弘文館。
- 山田隆文 2002「新羅金京復原試論」『古代学研究』159。
- 大和郡山市教育委員会 1972『平城京羅城門跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所編。
- 楊鴻勛 1996「唐長安城明德門復原探討」『文物』1996-4。

李恩碩 2003「新羅王京の都市計画」『研究論集XIV』奈良文化財研究所学報第66冊。

劉曉東・魏存成 1987「渤海上京筑時序与形制淵源研究」『中国考古学会第6年次会論文集 1987年版』。

劉曉東・魏存成 1991「渤海上京城主体格局演變」『北方文物』1991-1。

渡辺晃宏 2001『平城京と木簡の世紀』日本の歴史4, 講談社。

渡辺晃宏 2003「平城宮第一次大極殿の成立」『奈良文化財研究所紀要2003』。

井上和人 古代都城関係論文リスト (1984~2007)

1984・「古代都城制地割再考」『研究論集VII』奈良国立文化財研究所学報第41冊。

・「新益京(藤原京)造営に関する諸問題」『佛教藝術』第154号, 毎日新聞社。

・『藤原宮一半世紀にわたる調査と研究一』(共著) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館。

1985・「飛鳥京城論の検証」『考古学雑誌』第71巻第2号。

・『大官大寺一飛鳥最大の寺一』(共著) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館。

・『飛鳥寺一日本最古の寺院一』(共著) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館。

1987・「藤原京」『橿原市史 本編』。

1988・「都城制の展開一都城の定型化一」『季刊考古学』第22号。

・「藤原京造都と平城京遷都」『見て・読む・わかる 日本の歴史 第1巻』。

1994・『条里制研究の一視点一奈良盆地における条里地割施工年代の検討一』静邨詩社(私家版)。

1996・「条里制と開発の歴史一条里地割の施工年代をめぐって一」『月刊文化財』第398号,
第一法規。

・「平城京の造営尺度」『古都発掘一藤原京と平城京一』岩波新書。

1997・「官衙をめぐる諸問題」『古代における行政機構の成立と展開』奈良国立文化財研究所。

1998・「平城京羅城門再考一平城京の羅城門・羅城と京南辺条条里」『条里制・古代都市研究』
通巻14号。

・「平城京羅城門の再検討」『奈良国立文化財研究所年報1998-III』。

1999・「平城京条坊と条里地割再説一鳥居治夫氏の『追加質問』に答えて一」『条里制・古代都市研究』第15号。

2000・「アンコール遺跡群の空間配置形態についての基礎的分析」『メコン流域の文明化に関する考古学的研究』科学研究補助金研究成果報告書 研究代表者: 新田栄治。

・「平城宮造営尺長について」『奈良国立文化財研究所年報2000-III』。

2001・「平城京の都市計画と排水体系」『第6回下水文化研究会発表論文集』。

2002・「平城宮東院地区の造営年代一周辺条坊道路施工の実態から一」『奈良文化財研究所紀要2002』。

・「平城京の条坊設定方式について一山中章氏の説に対する批判一」『奈良文化財研究所紀

要 2002』。

- ・「平城京の実像—造営の理念と実態—」『東アジアの古代都城』奈良文化財研究所。
- ・『日中古代都城図録』（編著）奈良文化財研究所史料第 57 冊。
- ・「西大寺の造営と平城京右京北辺坊」『西大寺古絵図は語る 古代・中世の奈良』奈良国立博物館。
- ・「平城京の溝構造と疎通能力について」『土木学会平成 14 年度全国大会学術講演会梗概集』。

2003・「平城京右京北辺坊考」『古代荘園絵図群による歴史景観の復元的研究』科学研究費補助金研究成果報告書 研究代表者：佐藤信。

- ・「平城京造営の実像」『研究論集 X IV』奈良文化財研究所学報第 66 冊。
- ・「藤原京と平城京造営の実像」『文化財研究国際學術大會発表論文第 12 輯 新羅王京調査の成果と意義』（韓国語文）。
- ・「奈良の都の上水と下水—100ha の発掘調査を通じてみる古代都市・平城京の実態—」『水団連 秋季号／冬季号』77／78。

2004・『古代都城制条里制の実証的研究』学生社。

- ・「藤原宮南面外郭施設設定規格復元考」『奈良文化財研究所紀要 2004』。
- ・「平城京朱雀大路設定規格の再検討」『奈良文化財研究所紀要 2004』。
- ・「発掘『中ツ道』説批判」『奈良文化財研究所紀要 2004』。

2005・「平城京右京北辺坊考」『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会。

- ・「平城京形制の実像—50 年間・100ha の発掘調査の成果から—」『国際シンポジウム 東アジアの都市史と環境史—新しい世界へ—』。
- ・「平城宮の平面構造」『平城宮発掘調査報告 X VI 兵部省地区の調査』奈良文化財研究所学報第 70 冊。
- ・「考古学からみた平城京北辺坊について」『平城京右京北辺』元興寺文化財研究所。
- ・「渤海上京龍泉府形制新考」『東アジアの都城と渤海』東洋文庫叢書 第 64, 財団法人東洋文庫。
- ・「東アジア古代都城の造営意義—形制の分析を通じて—」『東南アジア考古学会研究報告 第 3 号 〈東南アジアの都市と都城〉』東南アジア考古学会。
- ・「渤海上京龍泉府と平城京」『〔TOGI 渤海シンポジウム〕古代日本と渤海—能登からみた東アジア—』上田正昭編, 大巧社。
- ・「渤海上京龍泉府形制の再検討—古代都城造営と国際関係—」『東アジアの古代文化 2005 秋』125 号, 大和書房。
- ・「平城京下層下ツ道の検証」『飛鳥文化財論攷—納谷守幸氏追悼論文集—』納谷守幸氏追悼論文集刊行会。

- ・「渤海上京龍泉府形制新考」『边疆考古研究』第4輯（中文），吉林大学边疆考古研究中心。

2006・「古代東アジア都城形制研究の新視角—藤原京・平城京・渤海上京龍泉府そして唐長安城—」『条里制古代都市研究』第21号。

- ・「藤原京の建設と廃替—東アジア世界の激動のうねりの中で—」『明日香風』第98号，飛鳥保存財団。

- ・「出土木簡籌木論」『木簡研究』第28号，木簡学会。

2007・「『飛鳥の道路遺構と方格地割』説批判」『条里制・古代都市研究』第22号。

- ・「日本古代都城の源流」『季刊考古学 特集・21世紀の考古学』第100号，雄山閣。

- ・「平城京の坊牆制（予察）—平城京の街区区画施設の実態—」『奈良文化財研究所紀要2007』。

- ・「目から鱗の古代都市論二題」『齋宮アカデミー会報』第8号，三重県齋宮歴史博物館 齋宮アカデミー事務局。

2008・『日本古代都城制の研究—藤原京・平城京の史的意義』吉川弘文館。